

に、『歴史』の要する時間の長さ如何といふことは、マルクスの學說體系の一部分を構成するものではない。マルクスは決して、この時間の長さを述べては居らぬから、此の問題に對するマルクスの意見がどうだつたかは、唯だ臆測するの外はない。よし又たマルクスが、之に就いて明言して居つたにせよ、唯だそれだけで、之がマルクスの學說體系の一部分となる譯のものではない。のみならず此の點に就いては、カウツキーが剩ますところなく詳論してゐるので、何人も之れをその儘ま轉載する以上のことは、殆んど出來ないし、それ以下のことをしようとも思ふまい。しかしカウツキーの議論をその儘ま轉載することは、紙面が許さぬので、此の點に興味を持たれる讀者諸君には、カウツキーの原文を讀んで頂くの外はない。

ベルンシタインの提出した第二點が、マルクスの學說を論ずるに當つて、果してどれ程かの意義があるものか、若し意義があるものとすれば、果してどれほど重要なものであるか。之は後に論ずることにして、茲には先づ、彼れが指摘したと想像されてゐる現象を吟味しよう。そもくベルンシタインが、その第二の論點を立てる爲めに用ひた唯一の證據は、收入に關する若干の統計であつたとは、既に述べた通りである。ところが彼れの用ひた統計的方法の誤謬も、丁度この場合に明かに現はれてゐる。と云ふのは、收入の種々なる等級、若くは種々なる分配額を、高、

中、低の三つに區別するには、固より何等の標準が無いから、従つて斯のような區別は、勢ひ獨斷的の區別である。また斯のような標準は、國々で違ふばかりか、一國內の地方々々の間でも、隣接地方の間でも互ひに異つて居るし、更に重要なことは、斯のような標準は時々で違つてゐる。然し以上の如き事實は暫らく措いても、斯のような収入の額は、決して其の人の社會上の地位をも、經濟上の地位をも現はす指數とはならぬといふ、根本的の缺點がある。或る人の収入は、必ずしも其の人を一定の社會的地位に置くものでもなく、またマルクスの口吻を學べば、量が質に變ずるような、或る例外的の情況の下に於ての外は、必ずしも其の人の収入は、其の人の經濟的境遇の結果であるとは限らない。であるから先づ以つて一定の収入は、必ず一定の方法により、または一定の泉源からのみ得られるものだと云ふことを立證しておかぬ限りは、唯だ單に或る人の收入を記述したゞけでは、其の人の社會的地位乃至は經濟的境遇を示したことはならぬ。然るにベルンシタインは不注意にも、收入から財産へ脱線して、一定の収入を得て居ることは、即ち、一定額の財産の所有を意味するものと推定してゐるのである。この不注意は、畢竟争點となつてゐる眞の問題を、全然理解して居らね爲めである。事實上、一定の収入額は、必ずしも常に一定額の財産の所有を示すものではない。否な大多數の場合、そうではないのである。農業者や

製造業者や、雜貨商や、教師や、陸軍士官や、機械技師などが、皆な同一額の収入を有する場合
はあるが、それにも拘らず、彼等の社會的地位や、經濟的境遇や、各自の所有する財産額は、全
然違つて居ることもあれば、根本的に異なつて居ることもある。そこで問題は其の人の収入如何
ではなくて、この収入を何から得て居るか、と云ふこと、そして彼は如何なる狀況の下に、如何な
る方法によつて、之を得て居るか、と云ふことでなければならぬ。然しそれとも、單に彼れは財産
を所有して居るか所有して居らぬかと云ふことや、または其の所有する財産の額さへ調べればよ
いと云ふ譯ではなく、若し財産を所有するとせば、其の財産は何で成り立つて居り、且つ収入を
得るためには、この財産が如何に運用せられて居るかを調べなければならぬ。この最後の點の
重要なことは、讀者諸君が、前節に述べた財産の種類と職業とが及ぼす心理的、思想的の影響に
想到せられたなら、おのづから明らかになると思ふが、此の點に就いては、尙ほ後節にも詳論す
る。

けれども本章の初めにも述べた通り、ベルンシュタインの議論のほんとの力は、彼れの信ずる事
實を立證する爲めに用ひた統計的材料にあるのではなくて、彼れの觀察した社會的現象——マル
クスの述べた、資本主義の進化的傾向を打ち消すかの如く見える社會的現象——そのものにある

即ちベルンシュタインの議論の正味は、上に掲げたうちの第三點にあるのである。そこで眞の問題は斯うである——資本家側が個人的の經濟行爲に代へるに、會社組織を以つてしたといふ、この近代に於ける社會經濟的要素の發展は、資本家階級の運命の上に、如何なる反應を與へるかと言ふことである。但し吾々の研究は、單に資本家階級の間^に於ける、收入の分配といふ問題にのみ限らないで、同時に此の分配は、如何にして、また如何なる情況の下に、行はれるかと云ふことを研究しなければならぬ。詳言すれば、吾々は單に一人々々の資本家が、労働者の創造した剩餘價值のうちから其の配け前として、ど、れ、だ、けを受けると云ふことを明らかにするばかりではなく、この配け前は如何にして定まるかと云ふこと、彼れはこの配け前に與づかる爲には何をしなければならぬか、と云ふことをも發見しなければならぬ。更に亦た、彼れがこの配け前に與づかるといふことや、彼れがこの配け前を得る方法などの結果として、彼れは同僚たる他の資本家と、その他の階級と、そして社會全體、即ち社會の組織體全體と、如何なる關係に立つこととなるかをも明らかにしなければならぬ。

ベルンシュタインは、マルクスの價值學說の重要を論じて、労働階級が剩餘價值を創造し、そして資本家階級が之を吸收すると云ふ事實は、經驗的に立證し得べき事實であつて（固より之はべ

ルンシタインの満足とするところ)、それが如何なる經濟法則の結果として行はれてゐようとも、同じことである、と云つて居る。この議論は謂ゆる『倫理的』前提から出發した場合には、充分結構かも知らぬが、科學的歴史的の見地からは、全然不充分なものである。ベルンシタインは、剩餘價値の創造と、資本家階級による其の吸収とは、どんな經濟法則によつて行はれて居つても相異はないと云つたが、純粹に經濟的の意味からは、この相異が極めて重要なことは、既に充分に指摘したところであるが、茲には、その社會的乃至は心理的の意味とも云ふべき方面からも、極めて重要なことを力説しておきたいと思ふ。なぜならば全體としての社會と、其の内にある各階級とに、各々その特質(その心理をも含めて)を賦與するものは、單に或る階級が剩餘價値乃至は剩餘生産物を創造し、他の階級が之を吸収するといふ事實だけではなくて、それが如何にして行はれて居るか、と云ふことにあるからである。そこで會社組織の發達が、資本家階級の運命にどんな影響を與へて居るかを研究する場合には、單に資本家階級の數に及ぼす結果ばかりでなく、その性質に及ぼす影響をも、否な主として此の影響を考察しなければならぬ。なぜならば、資本家階級の性質如何によつて、全社會組織の性質が定まるからである。更に亦た資本家階級の性質如何によつて、その社會組織の持久力と、他の社會組織への急速な變化とが定まる場合もあるか

らである。そこで吾々は二つの方面から、此の問題を吟味しよう。

先づ數から始めよう。會社組織を以つて個人的經營に代へることは、ベルンシタインの斷定してゐるように、資本家階級の數の減退を阻止し、若くはその膨張の傾向を助長するであらうか。

斷じてそうでない。そしてベルンシタインの用ひた經驗的統計方法は、貧弱ながらも、尙ほ且つこの事實を示してゐる。即ちベルンシタインは、勞働階級の絶對的の増加をも、比較的の増加をも否定して居らぬ。然るに人口全體が増加し、之に比例して勞働階級と資本家階級とが共に増加する場合は別として、そうでない場合には、此の二つの階級は、どちらか一方が減ずることによつてのみ他の一方が増加するのであつて、兩方が同時に増加することは、明らかに有り得べからざることである。ところが若し、ベルンシタインを信用しなければならぬとすれば、正さにこのあり得べからざることが行はれてゐると云ふことになる。即ち資本家階級も勞働者階級も、どちらも同時に、一方の減少によつて増加して居るのである！。ベルンシタインが斯ような不條理に陥入つたのは、單なる數字を、無批判に取り扱つた結果と見るの外はない。之に反して、若しベルンシタインが實際の現象を細心に吟味したならば、會社組織の發達は、資本家階級減退の過程の進行する速力を遅そくすることはあつても、此の過程そのものを廢止することの出來ないこと

を覺つたであらう。資本家階級は減少しなければならぬ！。

これと關聯して、先づ第一に考ふべきことは、既にマルクスの指摘してゐる通り、會社組織そのものからしてが、固より他の意義もあるが、同時に資本聚積の一手段だと云ふことである。即ち個々の資本家の零碎な資本を結合することにより、更に適切に云へば、中産階級と、勞働階級の上層との零碎な資本を、銀行や貯金制度によつて、直接若くは間接に大資本家の手に渡し、斯くて初めて尠大な資本と企業との聚積が行はれて居るのであつて、斯のような驚くべき資本と企業との聚積は、會社組織によらないでは到底不可能であるか、それとも非常に困難である。そして其の結果は全産業組織を、一層高い程度の資本化に引き上げ、従つて小資本は、最早やその企業に適せぬものとなり、利潤率はますます低落するから、小資本の収入では最早や生活することが出来なくなり、斯くて小資本家は勢ひ驅逐せられることになる。斯ように會社組織なるものは、一方には、小資本家乃至は小資本家の或る者には、能くその小資本を結合し、之によつて長かれ短かれ、新らしい命脈を保たせるものではあるが、それと同時に他方に於いては、最早や是等小資本家の獨立の立場を維持しきれなくするような、小資本家驅逐の作用に一段の刺戟を與へるものである。即ち一方には、資本家階級減少の作用を遅らすが、他方には、却つて之を促進する

ものである。

之に關聯して考察すべき今ま一つの點は、會社組織なるものは、いろ／＼の不正直にして投機的な事業經營の形式のうちで、最も適切な、最も優秀な手段であつて、かの横暴な富者が、自己の無力な爲めに彼等に信賴して來る資本家階級の下層から、個人的競争が僅かに彼等の手に残してゐるものをすつかり巻き上げる手段となるものである。『好景氣』の時期には、若し自分の資本でやらなければならぬのなら、何人も手を着けようなどゝは夢にも思はぬような、有ゆる種類の商工業上の事業が始められる。會社組織によると、是等の事業を公衆の費用で『創立』することが出来るので、世の中には『一般公衆』の金で事業を起さうとする——と云ふよりも『一般公衆』の金を狙つてゐる——『創立發起人』が、何時でも澤山にある。そしてこの『一般公衆』なるものは、即ち資本家階級の下層から成り立つて居るのである。この『公衆』は、經濟的に大資本家と競争の出來ない地位にあるので、彼等の事業の計畫にくつついて、あわよくば昔の財産の残りか乃至は僅かの貯金の、有利な使ひ道を見つけようと願つてゐる。

すると程なく恐慌、乃至は『收縮』が襲來し、泡沫は残らず消え失せて、その跡には自分の財力は一本立ちでは資本家たるに足りないにも拘らず、資本家氣取りになつてゐた小蠅の死骸が、

數を亂して横たはる。尙ほこの現象の別の方面にも、極めて重要な事柄があるが、それは他の問題に關聯して後節に論ずることとして、茲には唯だ、會社組織と云ふものは、小資本家をして、自分の採算ではとても着手することの出来ない經濟上の事業に、仲間入りをさせる手段であるばかりでなく、同時に亦た、彼等の小資本を巻き上げて、これを浪費させるなり、乃至は直接間接に、これを大資本家の手に移す手段であるといふ事實だけを指摘しておきたいのである。この事實は、ベルンシュタインとの論争の初めに、カウツキーによつて指摘せられたが、その後吾々は、この巻き上げ作用の事實を證明する無数の證據を見たのである。トマス・ダブルユ・ロウソンの素つ破抜きは、資本主義王國の最高の藩屏たる人々が、單に商業界の自然の『膨張』や『收縮』に伴ふ偶然の出來事としてばかりでなく、斯ような巻き上げ作用を促進する爲めに、故意に悪意の計畫を以つて商業界の『膨張』や『收縮』を製造して、この巻き上げ作用に従事してゐることを示してゐる。また氏の素つ破抜きは、小蠅が自分自身でやつて來ぬ場合には、銀行家や、貯蓄銀行や、其の他の預金機關が彼等に代つて、そうしてゐることを示してゐるが、この有様は、まるでマルクスの診斷の正確を立證する爲めに、互ひに相ひ競ふてゐるかのようである。

然しながらこの巻き上げ作用は、どこまでも資本主義の大海豚が、弱少な同胞に對する不正直

な結果とばかり見做してはならぬ。之に反してこの作用は、會社組織そのものゝ自然の働らきに基づく、自然の作用である。たゞこの作用は、暴露せられたような『弊害』と會社組織による事業經營の濫用とによつて、一層助長せられてゐるだけのものである。なぜならば、恐慌と收縮には、自然的のものと人爲的のものとがあるが、いづれも皆な、小蠅の資本を大海豚の手に移すか、さもなければ後節に見るように、全然これを浪費し破壊して仕舞ふかに歸着するからである。

會社制度の『弊害』と『濫用』と、周期的に起る小資本の折りくゝの破壊や、大資本家への移轉などを外にしても、會社制度の普通にして必然の結果として——即ちその本來の用途と作業の方法との結果として——資本家階級中産階級の數を保存する上には、それは殆んど無効である。云ひ換へて見れば、獨立中産階級の破壊を喰ひ止める手段としては、會社制度は殆んど無効なものである。

會社組織による事業の一般普通の遣り方は、單に少數の人々、即ちこの事業を組織し支配してゆく富豪のみが、その利益の全部または大部分を壟斷するようになってゐる。この點を明瞭に理解する爲めには、吾々は事業と貸付資本との間の相異に注意しなければならぬ。即ち或る人が其の資本を、自分自身で事業に使ふて得るところの報酬と、同じ事業に使用する爲めに他の資本家

に貸付ける場合とは異つてゐる。第一の場合には、彼れは、事業から生じた利潤全部を收めるが第二の場合には、利子と名づける利潤の一部分を得るだけである。そして利子の額は、何時でもその事業から生じた利潤の額の半分とか三分の一とかいふような、一定の割合のものではないが然しながら其れは何時でも、利潤の一部分であつて、決して其の全部ではない。然らば資本の所有者と事業を經營する資本家とは、どんな割合で、その事業から生じた利潤の配け前を定めるかと云へば、それには先づ、他の條件が均しい場合には、資本所有者の冒かす危険を勘定に入れなければならぬ。即ち資本所有者が何等の危険をも冒かさぬ場合には、最低率の額が、利息として支拂はれる。これが即ち本來の利子である。何等の危険も伴はないで、唯だ單に、資本の使用に對して支拂はれる、右の如き利子を引き去つて残つた利潤の残高は、幾らあつても、之は資本家的見解に従へば、當然、事業の監督と之れに伴ふ危険に對する報酬として、すべて事業の經營に當る資本家の手に這入るべきものである。そこで若し資本家が、不十分な擔保で其の金を貸したなら、高い利息を取るが、この高い利息は、實は純粹の利子ではなくて、本來の利子に、貸主の冒かす危険に對して支拂はれる餘分のプレミアム（即ち狹義に於ける利潤の一部）を加へたものである。

會社組織の場合には、事業監督の仕事は株主の行ふものではなく、有給役員と使用人によつて行はれる。そして是等の役員と使用人とは、何時でも、この事業を組織し管理する金持であつて、彼等は利潤のうちで、事業監督の任務に對して資本家の受くべき部分を丸る取りにするばかりでなく、尙ほ其の上に、高い俸給と臨時の費用の形で、多額の金を取る。そこで事業に投資せられた資本全體から生じた利潤中の右の部分は、大資本のみの手に歸するもので、小蠅は少しもその露ひに與づからぬ。若しまた何かの拍子で、或る小資本家が、此の部分の利潤を得たにしたところ、これは株主全體がすべて小資本家のみであるといふ、例外的の場合でなければあり得ない、それは唯だ一人の小資本家だけのことで、其の他の株主に至つては、獨立の資本家が收める部分の利潤は、到底これを收めることが出來ないであらう。

そこで株主たる資本家に殘されるものは、本來の利子と、利潤のうちで、危険の報酬となるべき部分とだけである。此の點に於いては、株主たる資本家は、貸付資本家と同一の立場に立つてゐる。即ち或る會社の株を持つことに多くの危険が含まれてゐれば、彼れの受ける報酬(取れる場合には)は多いし、危険が少なければ少ないほど、配當の形で受ける報酬も少ない。

但し此の場合に彼れの冒かす危険とは、單に事業の上の冒險ばかりではなくて、會社の不正直な

管理による危険をも含んでゐる。且つ事業の有利といふことに就いてすらも、固より詐りがあるかも知れぬ。なぜならば、彼れは勢ひ他人の判断に依頼しなければならぬが、其の人々は、たゞ自分が澤山の給料を取るといふこと以外には、この冒險事業に利害關係を有せぬかも知れぬからあでるそこで目先きの見える株主は、完全な會社、即ち或る種の保證を提供するか、それとも事業の結果について約束をして呉れる有力な大資本家を載く會社に投資しようとする。しかし會社が安全であればあるほど、投資者は、債券の所有者ばかりでなく株券の所有者すらも、少くとも投資した資本に對して受ける利潤の額に就いては、いよくますます、金を貸す人の立場と同じことになる。これは何時でも、株式取引所に往つて見ればよく分かる。會社が安全であればあるほど、その配當は、單純な利子の水準に下がつて居る。勿論こゝに配當といふのは、投資した資本に對する、配當額の歩合を指したものである。或る時は極く安全な會社が（稀れではあるが）、非常に多額の配當をする場合がある。然し斯んな場合には、株券の値段は遙かに額面以上であつて、畢竟、配當率は普通の水準にあることとなる。そこで會社に投資しようとする小資本家は、獨立の企業家の遭遇せぬ有ゆる種類の危険を冒すか、それとも資本に對して、純粹の利子以外の何等の報酬をも受けないかといふ、痛たし痒ゆしの立場に陥入るのである。

けれども利子は、利潤全額のうちの一部分であり、しかも大抵はその一小部分に過ぎないから若し獨立の事業家たる地位さへ保たれるなら、當時一般に行はれてゐる利潤率で優に獨立の收入が得られるだけの資本を持つてゐる資本家でも、一會社の株主となつては、其れだけの收入の得られぬことは明白である。そこで彼等のうちの多數は、結局は現在の地位から陥落するの外はない。如何にも儲かりそうで、しかも失敗に終るような、有ゆる種類の冒險事業に資本を供給するのは、たいてい是等の人々である。彼等は安全な會社に投資したのでは、資本家としての地位が保てぬので、經濟進化の勢力の爲めに失つたところのものを、あわよくば一舉に取り返へそうといふ希望を抱いて、その資本を、此の種の事業に投ずるのである。

然し之れだけではない。差當りに安全な會社の投資者として、資本主義の坐食者たる地位が保てるだけの資本を持つ小資本家にしても、彼等の地位は、決して大丈夫ではない。利潤率に低落の傾向のあることは、既に示した通りである。利潤率の低落につれ、利潤のうちから、直接に若くは配當の形で、會社の債券や株券の所有者に、利子として支拂はれる部分も減少する。その結果、今日では優に獨立の生計の出来るだけの資本も、明日は、それには足りなくなる。斯くて陥落作用は、資本主義の進歩につれて増大する。

斯のような資本家階級減少の作用——資本家階級から無産階級への陥落は、その全作用が隠れてゐて、容易に看取し難いような形で行はれることもある。これは或る状況の結果であるが、それに就いては後節に考究する。が要するに此の場合にも、矢張り會社組織が一部の原因になつてゐる。但し此の場合には、會社組織の作用はそれほど重要な譯ではなく、資本家階級減少の過程を包む覆面の襞を、一層複雑にしてゐるまでのことである。

或るマルクス批評家は、マルクスは唯だ一つの作用——從來の中産階級の資本家が、斷えず無産階級に陥落するといふ唯だ一つの作用——しか認めなかつたかの如くに云ふ。そしてベルンシタインも其の一人である。なるほどマルクスの書いたものの中には、一讀したゞけでは、斯のような印象を與へる章句のあることは疑ひがない。また一般的傾向の概括的記述としては、之で善いのである。けれども其れは必ずしも、マルクスの記述した根本的の主要な傾向を、全然打ち消さぬまでも、幾らか之に影響を與へる逆流のあることを否認することにはならぬ。マルクスの著述の中から、その前後の關係や、または其の章句がその場合に用ひられてゐる當面の目的などを精密に調べないで、唯だ一章句だけを引用する危険はこゝにある。また他の問題に關聯して指摘したように、マルクス批評家が、有ゆる種類の矛盾を、マルクスのうちに譯もなく發見する理由も

こゝにある。マルクスがその學說體系を系統的に説明する爲めには、數卷の大冊を必要としたがそれで尙ほ彼れの事業は未完のまゝだつた。マルクスは有ゆる場合々々に、その箇所論じた傾向や法則に影響を及ぼしたり、または之を變更するような、一切の狀況を、一々反覆する譯には往かなかつた。そして之は自然、その著述の他の部分に收められた場合もある。彼れは讀者が之を記憶して居つて、同一の問題に關聯したすべての章句を通讀するものと見做してゐた。また時としては、彼は故らに、絶對無條件的の形式で記述をしておいて、跡から之れに制限を加へて往かうとした場合もあるし、また或る場合には、自分自身も信じて居らぬような推定を先づ掲げておき、跡から、この絶對的無條件的の記述に變更を加へたり、又は此の推定の不正確なことを指摘して、彼れ自身の學說を一層明白に、且つ一層系統的に敘述する手段としたのである。

そこで今ま問題となつてゐる事柄に就いて云へば、マルクスは資本主義の進歩の結果として、資本家階級から陥落した人々が、全部残らず、無産階級になるといふ積りでなかつたことは疑ひがない。其の中の或る者は、ほんの一時にせよ、半資本家、半無産者の地位に踏み止どまつて、收入の一半はその労働から得るといふ場合もあらう。更にその全財産を無くした者すらも、唯だ舊るい意味での無産者プロレタリアン——財産は何もないが、しかも近代的の意味での無産者、即ち生産機關を所

有せぬ労働者といふ意味での無産者ではない人々——たるに止まる者もあらう。彼等は最早や資本家ではなくなつても、尙ほ労働者とはならぬ場合もあらう。労働の代りに、頓智で飯を食ふ者もあらう。中には又た、昔の同僚の居候になるものもあらう。吾々の見るところでは、資本主義の進歩につれて、中産階級排除の作用の爲めにその地位を失つた人々の間には、この最後に述べた階級の割合が、だん／＼増加してゐるのである。

そこで謂ゆる『新中産階級』といふ、^{レライシヨニスト}修正派の叫びが揚げられた。そして収入に關する統計に

奇異な特徴の現はれてゐるのも、之れが爲めである。是等の統計を一見したところでは、賃銀以外の小所得を得てゐる階級が、如何にも多いように見えるが、之はベルンシタインの主張するよ
うに、^{コンセントレエシヨン}資本の聚積に伴ふ^{セントラリゼエシヨン}富の集中の作用が存しない爲めではない。斯ような現象は、先づ第一には、

資本の聚積に伴つて、賃銀奴隷制度が上の方に向つて生長してゐるといふ事實——賃銀奴隷制度がその性質と報酬との上から見て、資本主義進化の初期には賃銀奴隷の領分に屬してゐなかつた新職業をまでも包括して、だん／＼上の方に向つて生長してゐるといふ事實——によるものである。そして此の階級は、特に會社組織の發達によつて増加したのである。第二には、何等の財産をも持つては居らぬが、事實上にせよ見て呉れだけにせよ、兎も角獨立の地位を保つて、少くと

も形式だけは賃銀奴隷の範圍に這入つて來ぬ人々の階級が、増加した結果である。

そこで此の事實は、最近に於ける經濟上の發展は、中産階級の性質にどんな影響を與へたかと云ふ問題を惹き起す。しかし此の問題の研究に移る前に、吾々は次の如き事實を指摘しておきたいと思ふ。即ち企業聚積コンセントレエションの作用を、非常に緩慢なものとして見てゐる多くの議論や統計は、その實、集中された大きな事業に隸屬してゐる多くの事業家が、外觀と形式だけは獨立の存在を保つてゐるといふ事實によるものである。吾々はまた、ドイツに於ける最も有爲な新進社會主義者の一人たる、ハインリヒ・クノウが、此の事實を指摘する上に大なる貢獻をしたことをも、茲に附記しておきたいと思ふ。

そこで或人は、斯う反問するかも知らぬ——君の記述した作用の結果として、現在または從來の中産階級の人々は、皆んな残らず、その財産から収入を得る小資本家の地位を維持する譯には行かぬといふことは、事實かも知らぬ。けれども其れにしても、尙ほ無産者プロレタリアンの地位になり切らぬ『新』中産階級が残る譯である。この『新』中産階級は、何等の財産をも持たず、若くは經濟的に重要なほどの財産をも持つては居らぬが、それにしても無産階級とは別な一階級であるから、若しその數が可なり多いとすれば、看過することの出來ない一勢力である。この階級の數の多いことは、

収入の統計によつて確かに推測することが出来る。賃銀労働の結果と認められない収入は、それが財産を所有する舊中産階級の収入でない限りは、この『新』中産階級の収入でなければならぬ。そこで収入の統計は、少くとも、慥かに一つの事を證明してゐるものである。即ちこの財産の無い『新』中産階級は、財産のある中産階級と相合して、今日のところ、一個の大なる階級を成して居り、且つそれは徐々にしか減少しないと云ふことである。果して然らば、資本主義から社會主義への近づきつゝある變形といふ、吾々に興味ある問題に關係のある範圍に於いては、舊中産階級と新中産階級との間に、どんな相異があるであらうか。して見ればベルンシュタインが、社會主義の實現が若し中産階級の消滅に懸つてゐるものならば、少くとも差當りは、社會主義は一と寢入りしてゐてもよい筈だと云つたのが、詰りは正しいではないかと。

この種の質問に對しては、吾々は斯く云ひたい——既に指摘した通り、マルクスの學說のうちには、決して、社會主義の實現する前に、すべての中産階級が消滅しなければならぬと云ふことを含んでは居らぬ。従つて新中産階級が發達しつゝあるかも知れぬと云ふ事實は、マルクス説は修正しなければならぬといふ論斷に、何等の根據をも與へるものではない。但し之は勿論、その新中産階級が、舊來の中産階級との間に區別の立てられるほどに、異つてゐる場合のことである。

財産を所有する中産階級の消滅によつて行はれる富の集中に就いての、マルクスの診断が精確なことは、既に示した通りである。そして之ぞ資本主義から社會主義に推移する進化のうちに、決定的の重要をもつ事柄の一つである。けれども之が爲めに必要なことは、財産を所有する中産階級がその財産と引き離されることであつて、是等の中産階級を構成する人々が、無産階級に沈んでしまふといふことは、必ずしも、それほど必要な事ではない。今日の社會が、資本主義の生産形態から社會主義の生産形態に推移する爲めに——即ち生産機關を社會化する爲めに——最も重要なことは、唯だ第一には、是等の生産機關が、社會的性質をもつてゐるといふ事である。そして是等の生産機關の性質が、社會的であればあるほど（即ち資本の聚積^{コンセントレエシヨン}）よいのである。第二には是等の生産機關が、社會的の管理經營に適して居るといふことである。即ちその管理經營が成るべく少數者の手に歸してゐること（即ち富の集中^{セントラリーゼエシヨン}）である。そして労働階級の産出した剩餘價值——即ち資本家階級の収入——が、どんなに分配せられて居るかといふことは、左まで重要なことではない。そしてこの収入の分配状態が、幾らか重要になつて來るのは、たゞ次の二つの點についてである——第一、収入の分配状態によつて、財産所有者たる地位を保つことの出来る人數の多少が定まり、之れが富の集中の上に反應作用を及ぼす範圍に於いて。第二、社會の種々なる階級の心理

に影響する範圍に於いて。

第一の點に就いては、既に論じた通り、『新』中産階級は無害である。その存在は、富の集中作用を妨げぬ。否な却つて新中産階級なるものは、富の集中の直接の結果に外ならぬ。そこで幾らか重要だとすれば、それは唯だ第二の點である。

然しながら吾々は、此の點の研究に進む前に云つておかねばならぬことは、資本の所有、即ち財産は、資本家階級の本質であるから、この無財産の謂ゆる『新』中産階級なるものが加はつて來ると、茲に際限のない混雜を來たすといふことである。謂ゆる新中産階級と名づけられ、また収入統計の面ではそう見えるものゝ大部分は、實は普通の無産階級の一部であつて、謂ゆる新中産階級なるものは、その性質がどんなものにせよ、収入統計表から想像せられるよりも、遙かに少數である。この混同は一面には、マルクスは筋肉労働のみに、價值創造の性質を認めたかの如くに想像する、舊い、そして根づよい偏見の結果であり、又た一面には、事業監督の職分と、財産の所有との分離——前に云つた通り、會社組織の結果として——に基づくものである。斯ような情況の爲めに、無産階級中の大なる部分が、中産階級——即ち資本家階級の下層——に屬するものと見做されて居るのである。近來その報酬を『賃銀』と云はずに『俸給』と呼ぶ職業が澤山で

き、尙ほ頻りに増加してゐるが、是等の職業は、殆んど皆なこの例である。すべて是等の俸給取りはその俸給の如何に拘らず、恐らくは『新』中産階級の全部、少くとも確かにその大部分を成すものであるが、其の實は無産階級の一部たることに於いて、純粹の其の日稼ぎの労働者と選ぶところはない。但し俸給の額が多くて、其のうちから貯蓄し投資することが出来、また實際そうしてゐるようならば、勿論、例外である。斯ような投資をしてゐる限りは（例へば、自分は何か有用な職業に就いて衣食しながら、資本の残りを投資してゐるような場合）彼等は資本と労働との境目にあるもので、その地位はかの落魄した小農が、その郷村を立ち退くまでは『何か片手間仕事でもして』農業者として踏み止らうと試みるのと似寄つてゐる。しかし此の種の場合には、そう多くは無く、且つ彼等の境遇は、單に過渡的である。今ま一つ云つておくべき例外は、俸給が非常に多くて、明らかに、其の人の労働の價値を超過してゐる場合である。然し此の種の場合には、斯ような俸給は事實上、その會社を支配してゐる資本家に拂はれてゐるものだと言ふことが分かる。そして之はやがて大資本家が、小資本家から、その利潤の一部分を巻き上げる過程そのものゝ、一部であることが分かる。要するに以上の如き些細な例外を除いては、俸給取りは自分自身で何と思ふてゐるようとも、實は無産階級の一部なのである。

尤も是等の人々は其の門地や、交友や、習慣や、物の考へ方からして、實際に彼等の屬してゐる階級よりも、寧ろ上流の階級との間に、一致團結の感情をもつてゐることは事實である。けれども之が爲めに、彼等の社會的經濟的の身分の變はる譯はない。そして彼等が社會主義實現の事業に取つて有用である限りは、賃銀奴隸制度からの解放を目的とする労働階級の組織團結といふ一般的問題と、唯だ程度こそ違へ、性質に於いて異るところのない問題が、彼等の間にも起つて來る。そして中産階級の性質の變化は、労働階級全體の組織團結といふ一般的問題を解決する上にも、また彼等の特殊な組織團結の問題を解決する上にも、可なり重要なことである。

中産階級の性質は變化した。否な資本家階級全體の性質は、會社組織の企業が個人的企業に代はつた爲めに、變化した。唯だに其ればかりでなく、吾々の全社會組織の性質が、右の理由の爲めに、可なり重要な變化を受けつゝあるのである。そして是等の變化は、今日の社會を構成する種々なる階級の心理に、既に大きな變化を起こし、根底から全く之を革命しようとするのである。英國の一政治家の、『今や吾々は皆な社會主義者である』といふ有名な文句は、或る人々の考へるほど無意義な言葉ではない。勿論こう云つた御本人たる紳士は、自分ではこの言葉の、充分の意味を覺つて居らぬかも知らぬ。けれども彼れが、知らずしてこの言葉を發したと云ふ事實が、こ

の言葉の正確を證してゐる。そして彼れ自身はこの言葉に、吾々の解する意味とは、全然違つた意味を結びつけてゐるようとも、それは固より勝手である。そこでこの言葉の意味は斯うである――

――私有財産制度の心理、就中、個人的企業の心理である個人主義の哲學の命數は定まつた。そして生産機關の集合的所有の心理であり、人間の事業の社會的編制の心理たる集合主義の哲學は、着々として之に代はつてゐる。この變化は、既成の經濟的事實を直接に反映する法律の領域に起つてゐるばかりでなく、一層かけ離れた藝術や哲學の領分にも起つてゐる。勿論、尙ほ混沌状態であつて、さすがに何人も舊い理想の崩壞を見落すことは出來ぬが、さりとして能く、その全體の意義――新しい社會と之に照應するところの心理とが、非常な勢ひで進んでゐるといふ、全體の意義――を理解し得るものは少數である。

資本主義の純粹の表はれであり、そしてほんの近頃まで、全盛の哲學だつたスペンサー説は死んだ。そして忘れられてしまつた。來る日も來る日も、前日までは尙ほこびり着いてゐた此の哲學の遺物が、公然と棄てられて吾々の眼を驚かす。社會主義は當面の問題となつた。唯だに勞働階級の組織の發達を反映した『社會主義の脅威』ばかりでなく、コレクチヴィズム集合主義の原則と、集合主義的

317 思想の表はれとの承認が、當面の問題となつて來た。最近の米國々會はその著るしい證據を示し

てゐる。と云ふのは、國會で實行せられた事柄ではなくて、原則の上で讓歩せられた點である。即ち勞働階級の利益を目的とする方法や法律案ではなくて、斯ような心理の變化を示す、一切の立法上の企てである。

これに關聯して云つておきたいのは、曾て資本家仲間の間で、ルーズヴェルトはブライアンよりも、一層『危険な』社會主義者であるといふ叫びが揚げられたが、之には幾らかの據り所がある。と云ふことである。無論吾々は、どちらも社會主義者とは思はぬし、どちらも全然『安全』とは思ふが、しかし實際ルーズヴェルトは、資本家の立場から見て、それほど『健全』ではないと信ずるものである。要するに二人の相異は、反動的資本主義と進歩的資本主義との相異であり、反トラスト法と鐵道料金取締法との相異である。是等の立法は、いづれも大資本家に對して小資本家を保護する爲めの、純粹な資本家的政策ではあるが、兩者の遣り方に至つては、根本的に異なつた社會原則に基づいてゐる。前に述べたように、反トラスト法は、國家は唯だ警察上の任務を有するに過ぎぬとする學說を基礎とするところの、純資本主義的政策であるが、之に反して鐵道料金取締法は、社會的の生産機關は、先づ第一に、社會全體の利益の爲めに存するものであるから、従つて社會的の管理に附すべきものだといふ學說から出發する。斯く云へばとて、鐵道料金取締法

そのものが、何も重要なものだと云ふ譯ではない。否な鐵道の取締にしても、資本家的國家による鐵道の國有にしても、一向重要なものではない。けれども取締りをしようとする云ふことが、殊に米國の如き純粹の資本主義國に於いては、思想の傾向を示すものとして意義がある。更に人々の注意が、ブライアンの資本主義攻撃の遣り口たる収入の方面から、社會組織改造の眞の戦ひの戦場たるべき、生産管理の方面に移つたことにも、意義がある。

斯のような心理の變化を生じたのは、人々が事業の眞關係を、一層明瞭に認めて來たからではなくて、すべての心理の基礎たる社會の經濟關係が變化し、また變化しつゝあるからである。生産機關の私有は、資本主義的社會の基礎である。従つて亦た、すべての資本主義的心理の基礎である。そして所有といふことは、單にそれから収入を得ることを意味してゐるばかりでなく、實際上に所有すること、即ち管理することを意味して居る。謂ゆる『新』中産階級といふが如き、何等の資本も持たぬ資本家階級といふことは、用語の矛盾であり、變則である。しかし財産は持つてゐるが、この財産を管理しない資本家の立場に至つては、之に劣らぬほど變則である。眞の天才の識見を備へた驚くべき藝術家ゴルキーが、その小説中の人物をして、富の眞意義は、それによつて他人を支配する力の得られることだと云はせたのは、正さにこの眞理を道破したものであ

る。けれどもこの支配の力は、其の人が富から得る収入にあるのではなくて、富そのものゝ管理にある。そして此の富とは、今日の社會では生産機關と同意義である。

そこで『新』無財産中産階級なるものは、實は資本家階級ではないのである。否なそれは些つとも中産階級ではないのである。是等の人々が資本家階級と労働階級との、中間に立つて居ることは事實である。この意味からすれば、彼等は舊中産階級よりも、一層適切に『中』である。なぜならば舊中産階級は、資本家階級の下層に外ならぬからである。けれども之は階級でない。階級と云へば、多かれ少かれ類似の方法で、多かれ少かれ同じような収入を得てゐる個人の集まりと云ふだけのものではない。個人の集まりが眞に一個の社會的階級を成すには、彼等は一定の社會經濟的の職分を執つて居らねばならぬ。『新』中産階級の存在は、それに一つの社會的階級たる地位を與へるには、餘りに空である。彼等は單に他の階級の『居候』であるか、さもなければ彼等が『空談』から収入を得てゐる場合には、彼等は全く空に懸つてゐる。この『階級』は、さきに述べたようなブルジョアジーの特質をも、心理をも、少しも持つては居らぬ。彼等は財産を持つて居らぬから、財産そのものに對する愛着をも持つて居らぬばかりか、眞のブルジョアジーの特質たる經濟上の獨立と、個人的企業とに對する、愛着すらも持つては居らぬ。彼等は財産若くは財産權に

對する尊敬をも、經濟的獨立に對する愛着をも、従つてまた、『家長的干涉主義』乃至は社會主義に對する、生得的の憎惡をも持つては居らぬ。この『階級』の眼中にあるものは、唯だ收入である。そこで彼等の思想的代辯者——有ゆる社會改良家——は、收入問題に重きをおき、いつも之を第一の問題とするのである。自己の財産を支配してゐる舊ブルジョアジーに取つては、第一の問題は自主と獨立とであつた。彼は社會主義を未來の奴隸制度と見做し、すべての人々が社會主義のうちに期待する慰安そのものを、彼等は却つて憎惡する。新中産階級はそうでない。彼等は收入さへ減らなければ、否な少々は減つても、相當の期間、確實に保障さへせられるなら、その風來的の生活を、何時でも官廳の仕事なり、會社の勤務なり、其他の職業なりに變へることに躊躇せぬ。なぜならばこの新中産階級は、勞働階級以上でないまでも、勞働階級と同じほど、收入の不安定に悩まされてゐる上に、尙ほ地位の不安定があるからである。斯ように全然基礎のない宙ぶらりの『階級』に、根底ある自己獨特の心理の成り立つて居らぬのは自然であつて、それは勢ひ絶えず浮泛してゐるから、従つて新たな社會組織の實現に反對する社會的勢力としても、また其の實現を助ける社會的勢力としても、殆んど無價値に近いといふことも、勢ひ止むを得ぬ。之に反してこの『階級』は、その社會的存在の性質からして不安定的であり、何時でも變化すること

に躊躇せず、そして遂にはこの不安定を一掃し、少くとも之を軽減して、安定を與へるような變化を絶えず待ち望んでゐる。之が爲めには『政府による干渉』も、彼等の辭せざるところである。否な彼等は生存競争の戰場を整理する爲めには、個人以上に強い力の必要を感じてゐる。そして若し此の種の方法を思想化することが出来たなら、即ち『ステート・ソシアリズム國家社會主義』となるのである。

然しながらブルジョアジエの心理を失つたのは、財産のない名の中産階級だけではない。

舊中産階級の遺物であるところの株主たる小資本家も、その財産の支配權と一緒に、從來の心理をも失つた。なぜならば、舊ブルジョアジエの心理の基礎となつてゐたものは、財産の支配であり、個人的企業であつたからである。そして其の上に、この階級でも新中産階級と同じように、問題は唯だ、収入の多少と云ふことだけになつた。なぜならば、支配することの出来ぬ財産といふことは、之れまた用語上の矛盾だからである。彼等は自分でも亦た他人からも、財産を持つてゐるかの如く思はれてゐるが、實は持つてはゐないのであつて、彼等の持つてゐるのは、唯だ一定の収入に對する權利である。彼等は即ち、公共若くは私營會社の、年金受領者に外ならぬ。そこで彼等は、何時でもその假想的の財産を、一層形式的な年金、または其他の収入の泉源に代へることに躊躇せぬのである。

經濟上の獨立を奪はれ、その財産に對する支配の力を失ひ、そして個人的企業的機會を持たぬ
 彼等は、その慰安たる收入の保全以外には、何等の希望もない。彼等が若し理想を持つてゐると
 すれば、その理想は、丁度舊ブルジョア中産階級の正反對であると云つてよい。彼等がその事務
 を處理するやり方は、妥當と、效果と、就中、社會化の必要とを彼等に覺らせた。更にこの階級の
 人々は、株主中の少數者であるところから、勢ひ政府なり社會組織全體なりを、資本家の横暴ぶ
 りや貪婪に對して自分の權利を護つてくれる保護者と見る。とは云へ、この方面に對する彼等の
 思想が、革命的無産階級の思想でないことは事實である。彼等の夢みてゐるものは、勞働の爲め
 の社會組織ではなくて、利益を分配する爲めの社會組織である。彼等は奇妙な心理上の徑路によ
 り、國家を單に警官と見做す彼等の舊るい思想の外形の中に、先祖たちが生きてゐたなら吃驚り
 する程度にまで警察力を擴張することによつて、全然新らしい實質を滿たしてゐる。この階級の
 心理は、新中産階級のそれと同じく、新舊思想の奇態な混合物であるが、この混亂状態の中にも、
 彼等の社會主義に對する反對は、主義の問題ではなくて都合の問題だといふことだけは、明白で
 ある。

そこで『理想の崩壊』——資本主義的社會に於ける、心理状態の大變化——が起つた。之は既に

指摘した通りである。近來はまた、種々雑多な形の社會主義が現はれて來たのも、資本家仲間の間に社會的不安の聲の起つたのも、また之が爲めである。

『社會的不安』は全然——でないまでも大部分でも——下から來ると思ふのは間違ひである。勿論、勞働階級の間にも不安の瞬間がある。けれども仔細に檢らべて見たならば、謂ゆる社會的不安の大部分は、社會の上層の不安を反映したものに過ぎないことが分かる。更に勞働階級は、上層階級の精神上道德上の羈絆を脱するほど、それは自己固有の心理を發達して來るから、従つて勞働階級の間には『不安』は少なくなり、思想に於いても行動に於いても、いよ／＼ますます／＼堅實となつて來ることは、次章に述べる通りである。けれども勞働階級が、尙ほ中産階級の羈絆の下にあつて、その獨特の心理がまだ充分に成長して居らぬ間は、前に述べたような新中産階級や、舊ブルジョア分子の間に於ける心理の變化は、極めて重大な意義がある。そして是等の階級の心理が、極めて不安定の状態にあるといふだけでも、相應に重大な意義がある。なぜならば、それは先づ下層階級の間にも不安定の状態を惹き起し、斯くて神經的の活動を喚び起す。そしてこの神經的の活動が、一度び鞏固な明白な心理になると、それに對して、最早や有力な抵抗をすることが出來なくなるからである。

そこで要するに會社組織の爲めに、中産階級が數に於いて救はれたゞけのものは、質に於いて破壊せられてゐる。しかもそれは主として、會社組織といふ其の同じ作用によつて破壊せられたものである。即ち火事から遁がれたものは、洪水の爲めに亡ほされた。結果は同一である。中産階級——マルクスが目指してゐた中産階級——社會主義への道を妨げてゐた中産階級——の運命は定まつてゐる。

然し之れだけではない。會社組織は、唯だに中産階級を救ひ得なかつたゞけではない。それは今日の社會が、資本主義から社會主義へ推移する變化の事業に、大に役に立つてゐる。即ちこの事業は、私有財産の廢止と、之に代ゆるに生産機關の集合的所有を以つてすることに外ならぬ。そして之れぞ資本主義の根底を破壊して、社會主義的社會の基礎を築づくものである。資本家がこんな仕事をしてゐるとは一寸受取れぬが、しかも彼等のやつてゐるところは、即ち之である。資本家階級は自分自身を救はうとする狂熱的努力のうち、自分自身の存在を危うくし、自分の脚の下から其の地盤を掘り崩つし、唯だに資本主義の根底を撤廢してゐるばかりでなく、一切の階級的社會の根底——私有財産——を撤廢しつゝあるものに外ならぬ。この事業は今日まで看過され、相當の注意を與へられてゐなかつた。そして之れは亦た、收入問題が吾々の眼界を遮え

ぎつてゐた爲めである。今日の大資本家は、會社の利益や収入を得てゐるところから、彼等はこゝの利益や収入の泉源たる財産を所有しては居らぬといふ事實は、看過せられてゐた。大小の富豪金傑の巨萬の富を羨望の眼で見、増惡の憤りで見てる爲めに、驚く可き事實が却つて看過せられてゐた。即ち是等の巨萬の富は、單に収入に對する權利であつて、財産に對する權利ではないといふ事實である。そして法律は明瞭に、この事實を認めてゐる。スタンダアド石油會社とその全版圖の支配者たるジョン・ディー・ロックフェラーが、その支配下にある大會社の財産に對しては、ほんの少しばかりの部分に對しても、何等の所有權をも持つて居らぬことは、その工場に傭はれてゐる憐れなエレヴェーター小僧と選ぶところはない。そして若しロックフェラーが唯だの一弗のもので私用の爲めに領有しようとしたならば、法律はこれを他人の財産に對する冒認、または窃盜事件として取り扱ふであらう。

單に法律上の形式であると言ふ勿れ。法律上の形式は、何時でも經濟上の現實を表はすものである。法律上の形式は、時としては實質の無くなつた跡までも殘存して、空虚な形式に過ぎぬものとなる場合がある。斯かる場合には、法律上の形式は、過去に於ける經濟的現實の記録である法律上の形式が過去の記録でない場合には、それは何時でも現在に於ける現實を表はすもので、

此の場合には、形式のうちには實質が満ちてゐる。否な法律上の形式は、唯だに現在の現實を表
 示するばかりでなく、時としては未來を前兆することもある。今日のところでは、資本家が個人
 的經營に代用した集合的形式（即ち會社組織）は、尙ほその形式が未熟幼稚であつて、この集合
 體は依然として『私人的』のものである。即ちこの集合體から生じた利益は、私人たる各個人が
 享有するものである。けれども適當な利益の分配——新しい所有形態（そして此の新しい所有形
 態も、矢張りまた、新しい生産形態の表はれに過ぎぬ）に相應した分配——は、種子播きの跡に
 收穫の來るように、必ずや續づいて實現されるだらう。斯ような新しい生産方法と新しい所有制
 度とに應じて分配の方法を調節する仕事と、この三つの作用を出來得る限り、社會の全員の利益
 の爲めに發達せしめることは、充分に發達し、充分に組織され、そして充分に教養せられた勞働
 階級に俟つべき事業である。けれども過渡期に於ける經濟的の事業、就中、舊るき社會組織の有
 りる要素を、たゞ無暗に破壊する豫備的の事業には、吾々の敵といふ味方が、なかく役に立つ
 たし、また役に立ちつゝあるのである。彼等が何とかして其の運命から逃がれようとする死者狂
 ひの努力は、要するに、自殺することによつて絞首臺を免かれてゐるものである。

第九章 無産階級と歴史的任務

そこで愈々、資本主義から社會主義に推移する革命の能動的要素——無産階級——を研究する段取りとなつた。無産階級が資本主義から社會主義への變化を成就する任務と、この任務を無産階級は如何にして、また如何なる形勢の下に全うするかといふ問題（この後の方の問題は、謂ゆる資本主義の崩壊といふ問題を含んでゐる）こそ、謂ゆる舊マルクス主義者と修正論者との間の論争の神髓であると云つても、少しも矛盾の虞れはない。この問題は、社會革命といふ問題の裏側であつて、其の他の一切の問題は、要するにこの根本問題に歸着する附隨の問題に過ぎないものである。前にも述べた通り、純哲學上經濟學上の問題は、修正説本來の畑ではなくて、たゞ是等の問題が右の根本問題に觸れて居り、又たは觸れてゐると思はれてゐる範圍に於いてのみ、この論争の渦中に引つ張り込まれたまでである。そこで修正説の第一の問題は斯うである——資本主義から社會主義への變化を齎らしつゝあるのは何者であるか、そして此の變化は如何にして行はれるか、といふことである。そしてこれ以外の問題は、たゞそれが此の問題に何等かの光を投ず

る範圍に於いてのみ、興味を引くに過ぎぬ。受動的要素ともいふべき社會的諸要素が、この變化の上に行ふ役目と、その結果として、如何にこの變化の爲めに準備と地均らしとが行はれるかは、既に前數章に説明した通りである。そこで今度は、能動的の要素を研究しようと思ふ。即ちこの要素は、如何なる狀況の下に、能くその事業を完成し得るかを研究しようと思ふ。

尤もこの研究を進める前に、この問題に關する議論には、奇妙な特徴のあることを注意しておかねばならぬ。そして此の特徴は、マルクス説を根本から誤解してゐることに基因するものである。

殆んどすべての革命家は、明白にそう云つてゐるのと、さまで明白に云つて居らぬとの相異はあるが、マルクスは資本主義から社會主義への變形は、少くとも二つの獨立した原因によつて行はれるものと期待してゐた、といふ解釋から出發してゐるのである。そして二つの獨立した原因とは、即ち資本制度の經濟的崩壊と、資本主義に對する無産階級の反抗とである。ところが甚だしき人になると、この第二の原因を、更にまた二つに區別する者さへもある。即ち勞働階級に對する長と本主義の負擔の重みが、だんくに加はつて來ること、今ま一つは、勞働階級の實力の成る資である。そこで彼等は各々、是等のうちの或る特定の原因を認めることを拒まうとする。とい

ふのは、その一原因を認めることになると、彼れが最善と信じてゐる社會主義への戦闘方法に、差し響きを來たすと思ふからである。是等の人々の多くは、資本主義の經濟的崩壊に關するマルクスの預言（と彼等が想像してゐるもの）——謂ゆる『倒壊説』——に猛烈に反對し、社會主義は決してこの『要因』によつて齎らされるものではなく、従つて吾々は、苟も社會主義を欲するならば、必ずや他の要因によらなければならぬと云ふことを、立證しようとする。また彼等のうちには、資本主義によつて負はしめられる労働階級の苦痛の増加といふこと——謂ゆる『貧困増大説』——を重要視することに反對する人も随分ある。

斯ように彼等は、是等の『要因』若くは原因は、絶對的に獨立したものであつて、一方が無しにも他の一つが存在し得るものであり、相互の關係なしに存在し得るものであるかの如く論じ合つてゐるさまは、誠に笑止である。現に彼等の一人、しかも最近にこの論争の舞臺に現はれたルドルフ・ゴールドシャイトは、是等の種々なる要因は、各々異つた方向に働らくので、お互に相殺し合つてしまふ、と云ふことを示そうとした。そして彼等は一人として、マルクスは、資本主義から社會主義への變形に對する唯だ、一つの原因を示した唯だ、一つの推論——この變化に必要な經濟的條件を發展し、この變化を齎らす社會的勢力を産み出すところの、社會の經濟的發達——を提

出したゞけだと云ふ、苟も限のある者には白日の如く明らかな事實に、氣の附いた者が無い。原因は一つであるから、その各部分、若くは各方面は、相互の關係において、全體を眼中に入れて考察すべきものであつて、さもなければ、固より理解することは出来ぬ。勿論そのうちに含まれてゐる各々の部分、または各々の方面は、順次に一つ一つ考察することも出来るが、此の場合にも其他の部分をも常に念頭におかねばならぬ。そこで今ま茲に吾々が、是等の一部分または一方面に就いて考察する場合には、それは何時でも、既に考察した點、乃至は今後考察すべき點と關聯してのことである。

そこで讀者諸君の前に、是等のいろ／＼の點を明らかにする爲めに、吾々は之を二つの見地から考察しようと思ふ。即ち第一には、資本主義社會の發達の傾向に關するマルクスの記述は、それが勞働階級の境遇に影響を與へる範圍に於いては、果してどの點まで正確であるかと云ふこと第二には、勞働階級が、よくマルクスが彼等に期待した歴史的使命を果すべき適當の機關となる爲めには、勞働階級には果して如何なる境遇が——マルクス説に従へば——必要であるかと云ふ二つの見地から考察したいと思ふ。しかし此の點を詳論するに先だつて、吾々は讀者諸君の前に會て人間の手で書かれた最も立派な一文章のうちに、マルクス自身が描いた、資本主義から社會

主義に至る變形の描寫を提示しておきたいと思ふ——

『労働者が無産者に變じ、そして彼等の生産手段は資本に變じ、斯くて資本主義的生产方法が確立すると同時に、其の後に於ける労働の社會化の進行と、土地や其他の生産手段が社會的に利用せられ、從つて共同の生産手段になつてゆく變化と、それから私人的の所有者が收奪せられてゆく徑路とは、新しい形態を取るようになる。今や收奪せらるべき者は、獨立して働いてゐる労働者ではなくて、多くの労働者を搾取しつゝある資本家である。この收奪は、資本主義的生产そのものに内在する法則によつて、即ち資本の集中セントラリゼーションによつて行はれる。一人の資本家は多くの資本家を殺す。斯ような集中、若くば少數資本家による多數資本家の收奪と相ひ伴ふて、協同的な労働行程の形態、技術の上に科學を意識的に應用すること、土地の法則的の耕作、労働の用具が、共同でなければ使用し得られぬ労働用具に變化すること、結合し社會化せられた労働の生産用具として使用せらるることによつて、すべての労働用具が節約されること、すべての民衆が世界市場といふ網に絡まること、從つて資本制度は國際的の性質を帯び來ること——すべて是等の事柄は、いよ／＼ますます／＼大規模に發達する。斯ような過程から生ずる一切の利益を篡奪し獨占する大資本家の數が、絶えず減少すると共に、悲惨と、抑壓と、隸屬と、

墮落と、搾取との下にある大衆は増加する。が然しながら其れと同時に、労働階級——常にその數を増加し、資本主義的生産の過程そのものによつて訓練され、團結され、そして組織される一階級——の反逆もまた増大する。資本の獨占は、資本の獨占と共に起つて資本の獨占と共に榮えた生産方法の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社會化とは、遂には資本主義の外殼と兩立すべからざる點に到達する。外殼は破裂する。資本主義的私有財産の吊鐘は響き、收奪者は收奪せられるのである。』

この文章は、唯だ一つの過程を描寫したものであるが、しかも吾々には、之によつてマルクスは此の過程のうちに、三つの要點を區別してゐることが明らかになる。そして其の三つの要點は彼れが疑ひもなく重大視してゐるものである。即ち(一)この過程の技術上の方面、若くは、純粹に物質的方面とも云ふべきもの、即ち將來の社會の技術上物質上の(最も狭い意味での)基礎を供するところの、資本の聚積と集中、(二)この過程の技術上物質上の方面が、社會の成員、殊に現在の制度から將來の制度への變化を起すことの出来る、そして起そうとする能動的勢力を創造する労働階級の上に及ぼす影響、(三)その結果として、この過程の技術上物質上の方面と、一般には社會全體の必要、別けても労働階級の必要との間の矛盾衝突、即ちこの三つの要素であ

る。

第一點は、前數章に於いて既に詳しく考察した。第三點は前章にもちよつと論及したし、尙ほ詳しくは次章に於て考察する。そこで茲には第二點に就いて論究する。

『悲慘と抑壓と隸屬と墮落と搾取の分量』は果して増大するだらうか。或る革命家は答へて、否と云ふ。彼等は、労働階級の境遇は悪化してはゐらないで、改善せられてゐると云ふ。彼等は更に一步を進めて、マルクスが、労働階級の悲慘の甚だしくなることが、資本主義から社會主義への推移に必要なであると主張するのは、誤つてゐるといふ。慘めな、抑壓された、隸屬し、墮落し、搾取せられてゐる労働階級が、如何にして社會主義の爲めに戦ひ、よく勝利を得ることが出来ようか。

彼等は斯う問ふのである。そして労働階級の實際の境遇は、マルクスの學說に反してゐるといふ。彼等の主張を裏づける爲めに、彼等は、マルクスのあの文章を書いた時この方、労働時間は短縮し、賃銀は増加し、そして労働者は從來よりも善い家に住ひ、善い食物を食つて居り、貧窮状態は甚しくなるところか、漸次に緩和してゐるといふ事實——乃至は彼等が事實であると主張するところのもの——を指摘する。そして彼等は、それは最早や少しの疑問の餘地もない、何等の證明をも要せぬ事實を述べてゐるかの如き態度で斷定をしてゐるのである。ところが實際に於いて

は、是等の斷定は、疑問の餘地なき事實を述べてゐるところの騒ぎではないのである。現に勞働階級の間にかける貧困といふ問題が、尙ほ未決定の問題であるといふことを示す爲めには、此の問題に關する最近の著書、ハンタアの『貧困』、スバルゴの『子供の悲鳴』、テオドル・ロイトシタイン(註一)の論文などを挙げれば澤山である。事實は斯うである——表面に現はれたところ、就中修正論者が論據とする統計の數字に現はれた外觀は、極めて瞞着的だといふことである。

註一 Robert Hunter, Poverty, 1916. John Sparg, The Bitter Cry of Children. 1906. Theodor Rothstein, in Neue Zeit (1906).

第一に、多くのお役所的の統計には、故意の瞞着がある。其の實例としては、曾てワシントン
の統計局から公表せられた、統計報告を擧げることが出来る。即ちこの統計報告によると、一九
〇六年六月三十日に終る一年間に、賃銀は、或る主要工業では百分の一・五の増加をしたが、生活
費は約百分の〇・五の騰貴をしたに過ぎぬことになつてゐる。けれども此の報告は、研究を費やす
までもなく、一見して虚偽であつて、明らかに虚偽の前提を基礎としたものである。唯だ一點だけ
を指摘して見ても、博學な統計家諸君は、生活費を算定するに當つては、若干の主要生産物の價
格を基礎としてゐるが、是等の主要生産物は、明かに生活費の一小部分を成すに過ぎないもので

ある。例へばニューヨークでは生活費の四分の一乃至三分の一は地代として支拂はれてゐる。右の期間に、ニューヨークでは地代は恐ろしく騰貴した。ところが其れにも拘らず、博學な統計家諸君は、地代の増加を算入して居られぬ。けれども斯ような故意の瞞着は、事實そのものゝ誤り易いことから來る、無意識の瞞着に較べたなら、云ふに足りないものである。生活費が同一な場合には、労働者の幸福を比較するには賃銀額によるのが常であるが、賃銀の額は、決して労働者の幸福を示す指數とはならぬ。

尤も私は、茲には此の問題には立入らない。なぜならば、注意深い讀者諸君の既に觀取して居られる通り、マルクスは労働階級の貧困の増大といふことは、てんで云つては居られぬからである。マルクスの如き注意深い著述家が、貧困と云ふことに少しも言及して居られぬことは、大に意味あることである。唯だこれだけでも、吾々は安心してマルクスは労働階級の貧困が加はることを以つて、資本主義發達の必然の結果とは見做してゐなかつたと推定するに充分である。ところが此の問題に就いては、マルクスは何等の議論の餘地もないように、こゝには簡潔な文章に約説したことを、『資本論』の他の場所には、明白に記述してゐるのである。

『社會的労働の生産力が進歩するお蔭で、斷えず分量の増加する生産手段を、累進的に減少する

人力の支出によつて運轉することを得せしめる法則——この法則は、資本主義の社會（勞働者が生産手段を使役しないで、生産手段が勞働者を使役する社會）に於いては、全く逆になつて、次の如き形で現はれるものである。即ち勞働の生産力が高く、そして雇傭を求める勞働者の要求が強ければ強いほど、彼等の生活狀態——即ち他人の富を増す爲めに、若くは資本の自己膨張の爲めに、自分の勞働力を販賣すること——が一層不安になつて來る。そこで生産手段と勞働の生産力とが、生産的人口よりも一層急速に増加すると云ふ事實が、やがて資本主義的に見れば、勞働者の増加は、資本がこの増加した勞働者を自己膨張の爲めに使役し得るような條件の増加よりも一層迅速に増加するといふ、逆かさまの形を取つて現はれるのである。

『吾々は第四篇に於いて、相對的價値の生産を分析するに當つて、次の如き事實を見た——資本制度の下に於いては、勞働の社會的生産力を高める爲めの一切の方法は、個々の勞働者の利益を犠牲として行はれるものである。そして生産の發達を目的とする一切の手段は、生産者を支配し搾取する手段に變ずる。それは勞働者を一人前の人間から、半端な片輪はんぱなものとし、勞働者を機械の附屬物たる水準に引き下げ、その仕事の面白味を微塵もなくして、唯だ厭ふべき勞役にしてしまふ。そして科學が獨立の力として之に結合せられるに従つて、それは勞働者から生

産行程に於ける智力的の伏能を取り去つてしまふ。それは労働者の労働条件を改悪し、生産行程の間は、労働者を俗悪な點に於いて、いやが上にも厭ふべき專制に服従せしめる。それは労働者の一生涯を労働時間に變じ、その妻と子供とを、資本主義の編淨天シヤガアノートの車輪の下に引きずり込む。然るに剩餘價値の生産を目的とする一切の方法は、同時に亦た資本蓄積の方法である。そして此の蓄積の進む一步一步は、やがてまたこの方法を發達せしめる手段となる。そこで資本の蓄積に比例して、労働者の運命は、その賃銀が高からうが安からうが、どの途悪くなる外ないことになる。そして最後に、相對的の過剩人口、即ち産業の豫備軍をして、蓄積の範圍と精力とに釣合はしめるところの法則は、ヴァルカンの楔がプロメシウスを岩に打ちつけたよりも、一層しつかりと労働者を資本に釘付けにする。それは資本の累積に照應して、悲惨の累積を生ずる。そこで一方の端に於ける富の累積は、同時に反對の一端——即ち自己の生産物を資本の形で生産する階級の方の一端——に於ける悲惨と、辛勞と、隸屬と、無智と、殘酷と、精神的の墮落とを意味するものである。』

之は一點の疑ひもなく明らかである。労働者の運命、社會の一員としての労働者の一般的境遇は、その賃銀の高いと安いとに拘らず、資本の蓄積と共に悪くなるべき筈である。労働者の貧困

——普通の意味での——は、彼れの受ける賃銀の多少によつて定まるが、彼れの社會的境遇はさうではない。それには二つの理由がある。先づ第一には、或る人または或る階級の社會的境遇は、その社會に於ける他の人々、又は他の階級と比較して、初めて決定されるものだからである。それは絶對量ではなくて、相對量である。貧困といふことすらも、實は相對的の問題であつて、周圍の形勢の變化につれ、時々變化するものである。況んや社會的境遇といふことになれば、社會の他の階級と對照しなければ、決して定められない問題である。社會的境遇は、労働者の受ける現世の財寶の、絶對的の分量によつて決せられるものではなく、社會の有するすべての財寶のうちから、彼等が受ける相對的の配け前によつて決せられることである。斯う考へて見ると、資本家と労働者との間の溝渠が、益々大きくなつてゐることが分かる。之れは經驗上の事實として、萬人の均しく認めるところでもあるし、また前數章に於いて、吾々が理論上の問題としても立證したところである。

労働階級の幸福と悲惨とは、社會全體の富と、其の内から受ける各階級の配け前とを相對的に考へて決定しなければならぬといふ、前述の如き事情は、カウツキーとクノウとによつて指摘せられてゐる。ところがベルンシュタインは之を以つて、マルクスの論述をピクキツク流に誤間化し

去るものだとして、現にマルクスが『隷屬、墮落、搾取』といふ言葉を用ひてゐる事實を指摘する。此の點に就いてベルンシュタインの認めてゐるらしい矛盾は、吾々は不幸にして、見る事が出来ないことを告白する。之に反して吾々は、こゝでも亦たマルクスの批評家が、マルクス説の割合に單純な點すらも、理解する力の無いことを見せられるのである。フランツ・オッペンハイマーは、労働階級の『搾取』の増加といふ點を、學理的に論じて斯う云つてゐる——『マルクスは労働者に支拂はるべき賃銀に、限界のあることを認めては居らぬ。即ちマルクスによれば、労働者の賃銀を限定するものは、唯だ資本家の利潤だけである。マルクスは亦た、資本家の利潤率の下がり得る最低限度を定めても居らぬ。即ちマルクスによれば、この限度となるものは、資本家に蓄積の餘地を與へなければならぬと云ふことだけである。して見れば賃銀は、資本家の利潤率が一割から一割の一萬分の一に下がる程度まで騰貴することも、全然あり得べきことである』。そこで彼は凱歌を奏して、疑ひもなく一大明論と心得てゐる彼れの議論を結んでいふ——『斯ような場合には、云ふまでもなく「搾取」と云ふことも、實際上には、何等の意義もないものとなり、經濟的革命的の必要といふことも、問題でなくなるのである』と。オッペンハイマーの如き立派な人は扱ておいて、一人前の頭をもつた人間なら、こんなたわけた事が能くも云はれたものだとして、唯だ驚嘆する

外はない。思ふにオッペンハイマーの頭には、一割の一萬分の一といふような低い利潤が『正當』であるといふ考へばかりが泌みこんでゐるらしい。そこで利潤率がこの程度まで下落して、尙ほ且つ資本家的蓄積が持續せられる爲めには、一人の労働者が運轉しなければならぬ資本の額と、彼れの生産する剰餘價値の額とは、恐ろしい額でなければならぬと云ふことや、従つて此の場合には、マルクスの意味する『搾取』は、たゞに『實際上に』重大な意義があるばかりか、一割の利潤の場合よりも、事實上遙かに大きいと云ふような、小さいな事情は失念したのである！。序ながら之も亦た、事實や數字そのものは絶対に無意味なものであつて、他の事柄と對照してこそ、初めて意義を爲すといふ、しばしば繰返へした真理の一例である。

労働者の受ける賃銀の水準は、彼れの社會的境遇を決定するものでないといふ第二の理由、しかも主たる理由は、賃銀の水準が高いといふことは、決して雇傭の安全を伴はぬことである。と云ふのは、労働者が受ける毎週の賃銀は、彼れの實際の収入を計る唯一の標準たる、一ヶ年の賃銀額の多少を示す指數とならぬと云ふだけではない。之れも固より重大なことで、常に頭におかねばならぬが、尙ほ其の外にも、更に一層重大な事實がある。即ち労働者の一ヶ年の収入額の如何に拘らず、その収入は、年額の五十二分の一づゝを、規則正しく毎週儲けるのではなくて、不規

則にして豫見することの出来ぬとぎれのある、間歇的の雇傭によつて儲けてゐると云ふ事實は、唯だそれだけでも、彼れの社會的境遇に決定的の影響を及ぼすものである。そして此の事實こそ、資本家の掌中にある生産手段をして、やがて労働階級に對する支配の手段たらしめるものである。そして此の事實こそ、資本の累積をして、労働階級側の『抑壓と隸屬と墮落』の累積たらしめるものである。労働者の雇傭の不安は、『自由な』労働者に對する資本家階級の力の秘密であり、労働階級の精神上道德上の墮落の泉源である。そして其の結果労働者は、自ら進んで従順な奴隸となり、彼等を打擲する者の手にキッスするに躊躇しなくなるのである。なぜならば、それは資本家の掌中に、封建時代の領主が農奴の上に揮つてゐたよりも、奴隸の持主が動産奴隸の上に揮つてゐたよりも、更に大なる權力を與へ、『自由な』労働者の生命と自由とを支配せしめるからである。

それと同時に雇傭の不安は、労働組合の有する大なる引力の秘密であり、また労働組合が社會的教育的に重大な意義を有する所以である。労働組合をして、現に見る如く、労働階級の生活に於ける大なる要素たらしめるものは、労働組合が齎らす賃銀の増額ではない。また資本と労働との間の近代の大戦争は、その表面上の目標は何であらうとも、決して賃銀増額の爲めの戦ひではない。労働組合は、一層露骨な形で行はれるようになった傭主側の專擅横暴に對して、組合員を

保護し、斯くて彼等の雇傭の安全を増すこと、これぞ労働組合の神髓であつて、労働者が『組合の承認』や同情罷工——資本と労働との双方に、『當然の権利』を保障しようとする理論的の『協調者』が、最も厭ひ且つ理解して居らぬ二つの鬭争形態——の爲めに、大なる犠牲を拂つてゐるのも之が爲めである。

労働者は馱獸(資本主義は労働者を馱獸に變じようとする)に過ぎぬといふ断定から出發してゐる彼等には、飼糧桶かいまごけの秣まぐさを減らしもしないのに、何故に労働者は蹴るかといふことが分らない。けれども労働者は、自分を縛つてゐる鎖の祕密の力を、本能的に知つてゐる。そして労働者は、これを斷ち切らうと試みる。少くとも其の力を弱めようと試みる。彼は馱獸にされることにも、馱獸の地位に止どまることにも満足せぬ。彼は精神的の勇氣を恢復しようとし、人格を恢復しようとする。そして労働者は、この目的は、隸屬の原因たる雇傭の不安を全く除去するか、少くともこの不安を輕減するような、社會的勢力を組織することによつてのみ、初めて達せられることを知る。そこで労働者は、組合權の爲めに戦ふのである。ところがお上品な方々は、固より之を理解することが出來ぬ。然しながら資本家は、能く之を理解する。それ故に彼等は、正さに此の點に向つて蠻勇的に戦ふのである。彼等は隨分、賃銀も引き上げよう。労働時間も短縮しよう。そ

して若し止むを得なければ、其の他の『正當にして道理に適つた要求』をも聽くだらう。けれども彼等は、組合の無いことを欲する。少くとも開放工場オープン・ショップ(註一)を欲する。なぜならば彼等は何時までも、『自分の家の主人』でゐたいと思ふからである。言葉を換へて云へば、彼等は其の奴隸を、ちつとばかり良く待遇して、矢張り奴隸にしておくことに満足する。そして苟も奴隸の鎖に手を觸れること、彼等奴隸に道德的の勇氣を吹き込み、人格の精神を養ふようなことに對しては、彼等は最後まで力爭するのである。

註一 オープン・ショップは、組合員のみを雇傭する締め付け工場(クローズト・ショップ)の反對で、組合員以外の労働者をも雇傭する工場(譯者)。

資本と労働との間の斯ような闘争は、マルクスが描寫した楯の半面である。即ちそれは、マルクスの云ふように、資本家的生産過程そのもの、メカニスム機制によつて訓練され、團結され、組織された労働階級の反逆が、ますます増大しつゝあるものである。けれども之は謂ゆる『貧困になること』——と云ふよりも、寧ろ吾々がさきに述べたところの、ますます甚しくなつた搾取の作用——から獨立して働らいてゐるところの、獨立の作用ではないのである。然るに修正派レヴィジョニストの或る人々は、この闘争を以つて貧困に伴ふものであり、或る程度までは其の結果であると考へてゐるらしい。更

にまた修正派の他の人々、就中、近頃この問題を論じたルドルフ・ゴールドンシャイトの考へてゐるやうに、この鬭争の結果は、第一の作用（即ち貧困になること、搾取の増大）の結果を、必ず、若しくは多くの場合に、緩和するが如きものでもないのである。訓練や組合や組織の發達は、賃銀の増額と労働條件の改善とを迫ることにより、可なりの點までは、労働階級の貧困を緩和するこゝとが出来、従つてマルクス批評家の用ひた意味での、資本家的蓄積の『貧困にする』傾向を、全然または一部分、阻止する傾向がある。けれどもそれはマルクスの記述した傾向に對しては、少しもそんな影響を與へることは出来ぬ。詳言すれば、それは労働者を隷屬の地位におく作用に對しては、其の原因を除去するが如き影響を與へることは出来ぬ。即ちそれは労働階級の爲めに、雇傭を確實にすることは出来ぬ。それは又、現にあるだけの就職口を、適當に分配することは出来るが、人口の過剩、即ち産業の豫備軍を生ずる經濟法則の作用に至つては、幾分か緩和することは出来ても、此の作用を阻止することは出来ぬ。尤もこれは、この經濟的作用が労働階級の心理の上に及ぼす結果を、相殺する力はある。即ち資本といふ主人に釘付けにされてゐる奴隸の胸裡にも、之によつて自由人の精神と、解放の爲めに戦ふ勇氣とを喚起することが出来る。労働階級の訓練と團結と組織とは、資本主義の下に於いては、固より何等の自由をも彼等に與へること

は出来ぬ。なぜならば經濟上の條件が、彼等を資本に隷屬せしめるからである。けれども其れにも拘らず、訓練と團結と組織とは、労働階級をして、奴隸の境涯にあつても、尙ほよく何等かの自由の爲めに戦ひ、其の境遇の改善の爲めに戦ふ力を得せしめる。そして此の戦ひのうちから、究極の自由に對する要求が發達し、此の戦によつて労働者を教育して、闘争の原因と條件とを理解せしめる。斯くて労働者を、現在の制度に對する、自覺的にして攻勢的な敵とするのである。

それと同時に、この闘争は必ずや、時と共にますます激烈となる。なぜならば此の闘争は、單に労働者の境遇の低下する傾向を阻止するだけであつて、其の原因を除去する力はないからである。そこで獲得した勝利を維持する爲めには、絶えず闘争を續づけてゐなければならぬ。そして境遇の低下する傾向が加はるにつれて、此の戦ひも必ず激烈となる。そこでマルクスの云つた、労働階級の反逆の増大といふことになる。そして次に引用するルドルフ・ゴールドシャイトの近著にして、修正主義レタインジヨニズムに一新機軸を出した『貧困増大説と改善説』の一節は、誤つて居ることとなるのである。この修正説レタインジヨニズムの最新の現はれは、事實上、舊式修正説の失敗を認めたものであつて、従つて舊式の修正説とは、違つた行き方はしてゐるが、變つたのは唯だ形ばかりであつて、實質は依然として同一である。殊に物事の見方が形而上的なこと、即ち物事を形式的な、靜止的な、そして

部分主義とも云ふべき見地から觀察して、それ等の事物を動いてゐる状態において、その相互の内的關係を觀ることの出來ない點に於いて然りである。ゴールドシャイトは、次の如く云つて居る――

『先づ第一に、純經濟上の傾向と、之によつて喚起せられた心理上の反對傾向とは、社會主義の方向への發達を餘儀なくしてゐるにもせよ、此の二つの傾向の間には、尙ほ何等かの矛盾がある。例へば長い期間の間には、心理上の反對傾向の力が、企業の聚積、資本の累積、民衆の貧困といふような純經濟上の傾向に對して、有力な影響を及ぼすに足りない場合が必ずある。斯ような形勢の下では、社會主義實現の望みは、主として經濟上の傾向にある。けれども純經濟上の作用が、それを相殺するような、同じほど有力な心理上の作用を伴ふ場合には、そうでない。即ち斯ような場合には、資本家階級の手にますく資本が累積せられれば、之に伴ふて労働階級の政治上經濟上の勢力も増大する。そして労働階級の政治上經濟上の勢力の増大は、資本の累積の如き純經濟上の作用、わけても労働階級を貧困にする作用を、多かれ少かれ有効に沮止することゝなつて現はれる。故に組織せられた無産階級の力を前にして、マルクスの資本の累積と蓄積との學説を、そつくり其の儘ま支持しようとする者は、全く望みのない仕事をや

つてゐることを知らない者である。なぜならば、彼は資本主義生産方法の純經濟上の傾向は、必然に心理上の反對傾向を生ずると主張すると同時に、是等の心理上の反對傾向に、何等の實際上の影響をも認めないからである。そこで社會主義の理論家が、資本主義生産に固有内定する法則の獨立の行動によつて、資本家の收奪^{エキストラプロリテーション}を期待することは、明らかに賢明でない。之に反して心理上の反對傾向が、一段の活力を以つて、また自然法の力を以つて、純經濟上の作用を麻卑せしめなければならぬ。詳言すれば、資本制度そのものが、自分自身の重みの爲めに倒壊することは、可能の領域から、だん／＼と向ふに推し除けられなければならぬ。』

資本制度倒壊の問題は、前に云つた通り後章に論ずるが、上來述べ來つたことに、尙ほ附け加へて茲に指摘しておきたいことは、ゴールドンサイトの議論は、經濟上の條件と、此の條件が勞働者の上に生ずる心理的結果とを以つて、唯だに別々に働いてゐるばかりでなく、相互に相殺するところの、二つの獨立した動力と見做す二元論であつて、それは全過程を一つの全體として理解することが出來ず、全過程の一元的性質を觀取し得ないものだと云ふことである。

尙ほこのところに注意しておきたいことは、博學なマルクスの批評家は、マルクスが資本家的蓄積の一傾向と認められた悲慘の増大とは、貧困の増大を意味したものであると主張する。そして勞

階級の境遇が謂ゆる改善されてゐる事實を擧げて、右の傾向の反證としようとするのである。

然るに是等の批評家は、苟も労働階級の境遇が改善されたとすれば、それは悉く、組織された労働者の闘争（マルクスは之をも預言した）によつて獲得せられたものだといふ事實を看過して居るのである。労働者の現在の境遇は、單に資本家的蓄積の諸傾向の結果ではなくて、組織せられた労働者の闘争によつて變更せられた、資本家的蓄積の諸傾向の結果なのである。之が即ち資本主義の諸傾向に對する、マルクス自身の診断である。次に労働者の境遇の改善が、社會主義への進化の上に如何なる影響をもつかといふと、假りに斯ような改善が行はれて居るとしても、それはマルクスが、單に貧困の結果として社會主義が實現されるものと期待してゐた場合にのみ、意義を有するものである。言葉を換へて云へば、貧困そのものに、社會主義の實現を助ける何物かがあるとした場合にのみ（如何なる修正論者も今日まで、レフイツヨニストマルクスが斯ような思想を抱いてゐたと見做した者はない）、斯ような改善は、社會主義への進化の上に影響を有するものである。然るに前にも述べたように、マルクス主義の立場から見れば、境遇改善の爲めにする此の闘争こそ——闘争の進行中に於ける當面の結果はどうあらうとも——資本制度の究極の撤廢を齎らす、最も重要な要素（この事業を遂行すべき能動的勢力の關する範圍に於いては）なのである。

労働階級の間には反逆の精神が生長し成熟するにつれて、この階級には一個の新しい思想が發達する。労働者は、資本家と資本家的諸制度（これは闘争の場合、資本家階級側につく）との不斷の闘争のうちに生活してゐるので、是等の制度と、資本家階級の心理全體を憎惡するようになる。彼等は自己の力の外に頼むべきものがないので、自ら考へ、そして自ら自己の心理を形成するようになる。けれどもすべての思想は、その思想の形成せられる物質上の條件といふ基礎がなければならぬ。そこで労働階級の新しい心理は、新しい經濟力、即ち社會化せられた生産及び分配の機關と方法、並びに之に對する集会的の管理を基礎とするものであり、また之を反映したものである。労働者の心理は即ち集産主義コレクテイヴィズムである。労働階級は、一方に於いては、舊制度に對する闘争の形態（即ち集会的コレクテイヴィズの大衆的闘争）と、此の闘争から得られる利益（集会的に行動し、集会的原則に従つて組織されてゐる場合にのみ享有することの出来る利益）と、そして善く組織され善く發達した。デモクラチックな管理の形態と行動の形態とによつて、斯ような新しい心理の形成を促進せられると同時に、他方に於いては、一般に舊るい心理の分解、わけても労働階級と密接に接觸する中産階級が、舊るい心理を棄てることによつて、新しい心理の形成を助けられるものである。

これと同時に労働階級は、着々、經濟力と獨立とを増して來る。といふ意味は、國民の經濟生

活のうち、労働階級はいよ／＼ますます、責任ある地位を占め、會社組織や其の他の方法による資本の蓄積と集中との發達を、自己に有利に利用する。殊に會社組織の發達につれて、資本家階級は其の職分——支配階級本來の職分たる經濟上の管理——を労働階級の手に移す。斯くて労働階級は、唯だに其の思想が×××になるばかりでなく、この×××を實現すべき組織せられた力を持ち、××の長には、一切の社會上經濟上の行動と職分とを自分の手に引き取つて、これを有効に遂行すべき完全な準備を得るに至るのである。

第十章 社會革命

吾々は今や、修正説レウイッシュニズムの中心問題に當面する。そして修正論者の其の他の一切の理論は、すべてこの中心點から出發し、其の他の一切の推論は、すべてこの中心點に集まるものである。即ち、吾々は今ま修正説の全軍勢を動かしてゐる開戦の理由——社會革命といふ問題——に當面する。社會革命の赤旗、これこそ彼等のうちの何人も、見るに忍びぬ赤い布片れなのである。彼等の間には、よし互ひに一致せぬ點があるにもせよ——そして亦た實際、不一致の點が少くないが——それにも拘はらず、社會革命は來ぬだらう、また來てはならぬ、そして來る筈もないと云ふ一點になると、彼等は悉く一致する。スツルーヴェはこれを哲學的に立證し、ツガン・バラノフスキーはこれを數理經濟學的に立證し、オッペンハイマーはこれを社會學的に立證する。そしてベルンシタインに至りては、ちよつと分類の出來かねる混成的の方法で立證し、其の他の人々も、それ〴〵に陳腐な方法で立證するのである。

そこで斯ように彼等を奮起せしめた社會革命とは、一たい何だらう。それは勿論、資本制度

から社會主義制度に變化する事實ではない。なぜならば彼等は悉く——殆んど悉く——何等かの形に於ける此の變化を信するからである。そこで彼等の反對するのは、この變化は如何なる形態または方法で行はるべきかといふ、マルクス説の示してゐる變化の形態または方法なのである。即ち彼等の反對を惹き起すのは、マルクス説は、この變化が急激に行はれるといふこと、この變化は階級の鬭争が頂點に達したとき、暴力的方法によつて行はれるといふことを暗に意味してゐる點である。彼等によれば、この變化は、想像のつく限りの色々の方法で來る筈だし、來なければならず、また來るだらうが、唯だ然し如何なる場合にも、それは急激でもなく、激烈でもないのである。なぜならば彼等は皆な、激烈といふことには激烈に反對するからである。そして獨り腕力的の激烈に反對するばかりでなく、有ゆる種類の激烈または動搖に反對する。そこで彼等の觀念によれば、社會主義は、資本主義の漸進的の擴大または縮少によつて來るものであつて、マルクスの想像したような、多かれ少かれ急激な、そして多かれ少かれ激烈な、腕力的、社會的、乃至は經濟的の巔覆によつて來るものではないのである。

マルクスは斯う云ふ——生産機關の集中と、労働の社會化とは、遂には資本制度の外殼と兩立のできぬ點に到達する。そこで外殼は破裂する。資本家的私有財産の吊鐘は響き、『收奪者は收奪

せられる』。ところがスツルヴェは、これは餘りに急激である。そして哲學上から全く不可能である」と云ふ。一つの社會制度から他の社會制度への急激な變化は、之を説明し得べき哲學上の方法もなければ、之を推論すべき論理上の方法もない。それ故に、急激な變化はあり得ない。『すべて
の變化——最も根本的な變化ですらも——の連続性といふことは、是等の變化を理解する上に缺くべからざる認識論上、並びに心理學上の假定である。進化の原則は、因果律と似寄つた地位にあるもので、それは普遍的に有效な形式である。そこで事物の根本的の變化も、之を理解する爲めには、矢張りこの普遍的の形式たる進化の原則に當て箴めて理解しなければならぬ。この變化の内容と原因結果の關係に就いては、進化の原則は吾々に何事をも語らぬ。それは唯だ、吾々に變化の形式を示すだけである。そして此の形式は即ち連続性である。そこで『自然は跳躍せぬ』といふ古い格言は、『智力は跳躍を許さず』と變へねばならぬ(註一)。これはすべて眞理かも知れぬし、
又た眞理でないかも知れぬ。吾々は茲には、この問題の決定を試みようとはせぬ。吾々に取つては、之が眞理であることを望むが、さりとて若し之が眞理としても、宜しく認識論と心理學とをして、勝手に探究せしれむばよい。『自然は跳躍せぬ』といふ格言が、尙ほ吾々の學問上の道具立ての一部分たる範圍に於いては、それは單に、何等かの原因がなくては、何事も起らぬといふだ

けの意味に外ならぬ。そして若し充分な原因がある場合には、自然は跳躍するのである。事實上に於いても、自然界には緩慢な變化があるほどに、急激な跳躍が行はれてゐる。そして外殻の破裂といふ、マルクスの用ひた形容は、この急激な跳躍の最も普通な、そして最も完全な實例と見做してよい。且つ急激な跳躍は、決して進化の原則と抵觸するものではない。吾々の觀るところによると、スツルーヴェが進化の原則を事實上、單なる緩漫性に縮少してしまつたのは、此の原則に對する一大不正である。なぜならば外殻の破裂といふような激烈な跳躍は、スツルーヴェの考へてゐるように、進化過程の連續性に少しも累ひするものではないからである。否な反對に、斯のような激烈な跳躍こそ、進化過程の一部であつて、それはすべての高級な生活形態に於ける進化過程の頂點であると同時に、この過程を更新する出發點となるものである。自然の連續關係がこの通りだとすれば、苟も認識論たるものは、此の自然の連續關係を説明して、吾々に理解せしめることが出来なければならぬ。ところが自ら認識論と銘を打つた學説が、それを爲し得ぬといふならば、それは自ら、認識論でないといつて居るのに均しいものである。

進化學說』。(Peter von Struve. Die Markxishe Theorie der sozialen Entwicklung In Ar-

chiv für soziale Gesetzgebung und Statistik.)

スツルーヴェの提起した今ま一つの哲學的『反對論』は、唯物史觀を論據とするものだと言ふ觸れ出しで、彼れは唯物史觀を擁護する爲めに、マルクスと鬪ふべき使命を感じた譯である。スツルーヴェによると、唯物史觀に従へば、社會組織を形成してゐる法律形態は、全組織の瓦解を來たすほどに、それほど生産形態と全然兩立し難いものとなり、また全然相ひ矛盾するものとなることはあり得ない。なぜならば正當に理解した意味での唯物史觀によれば、法律形態は物質的條件が變化するごとに、斷えず此の變化に順應して變化す可き筈である。そこで經濟的勢力の變化が、同時に法律形態を變化しないかの如く想像するのは、經濟的勢力の力を見縊つたことになるからである。吾々は茲には、スツルーヴェが唯物史觀を『適當に理解』して居らぬことを立證する爲めに、長い議論はしないが、唯だ云つておきたいことは、若しスツルーヴェが、唯物史觀を適當に理解してゐるものとすれば、悲しいかな、唯物史觀は間違つてゐると云ふことである。なぜならば法律形態が、經濟上の狀況と全く矛盾したものとなり、絶対に兩立し難いものとなり、そして其の結果として、極めて重大な、そして極めて激烈な混亂を來たすのは事實であつて、斯よ

うな事實は、歴史の上に澤山の實例があるからである。吾々は固より、『經濟上の要因』の重要を認めらるものである。けれども經濟上の要因といふ、しばしば濫用し誤用せられた勢力は、その自稱崇拜者の或る者が吾々に信ぜしめようとするほどに、それほど萬能なものではない。少くとも其の影響は、彼等の想像するほどしかく直接でなく、従つて彼等の想像するほどに、しかく圓滑に働らくものではない。吾々は如何に『經濟上の要因』を尊重すればとて、其の爲めにこの眞理に盲目とはなり得ない。そればかりではない。スツルーフエは唯物史觀に對する老婆心の爲めに、資本制度の經濟的條件そのものからしてが——マルクスに従へば——矛盾の塊まりであつて、従つて圓滑に働らく法律制度や政治制度となつて現はれることの出來ないといふ事實を、全く忘れてゐるのである。

そこでルドルフ・ゴールドンシャイトが、謂ゆる『社會學上の波動』といふ學説を立てたのは、純哲學上の立場から『社會革命』に反對する者が、必然に陥らざるを得なかつた不條理を除去する爲めであつたことは明かである。この學説はなか／＼旨まく出來上つて居り、如何にも能く、諸先輩の陥入つた甚だしい誤謬には陥入らないで、しかも社會革命の不可能を示さうとしたものである。また此の學説は、マルクス説の前提の大部分を承認してゐるので、如何にも尤もらしく聞える。

それは斯うである――

資本蓄積の傾向は、マルクスの言ふように、労働階級の悲惨を増加する。それと同時に此の傾向が、労働階級を組織團結せしめることも、同じくマルクスの明白に述べてゐる通りである。この結果として、組織せられた労働と資本との間に、闘争が起る。そしてマルクスはこの階級闘争に、大いに重きをおいてゐる。然るにこの闘争は一勝一敗であつて、時には一方が勝つと思へば、時にはまた反対側が勝つ。そして資本家的蓄積の傾向が、労働階級の境遇を大いに引き下げる點まで進行すると、その結果は、無産階級の革命的感情を喚び起す。そこで無産階級は奮然として闘ひを初め、遂には勝利を得て著るしく其の境遇を改善する。そして其の結果は、無産階級を従來よりも一段高い水準に引き上げるのが常である。この改善せられた境遇は、或る時期の間繼續するが、資本家は競争の答に驅られて、遂には態度を一變し、資本家的蓄積の傾向を強行して、労働者の境遇をも、従前の水準に引き下げようと試みるに至る。けれども之は、一部分しか成功せぬ。なぜならば労働者が、一段高い幸福の水準に達すると、彼等は之を利用してその團體組織を強固にし、知識と聰明とを増加する。そして従前の低い水準に引き落とされるに先つて、彼等の間に反抗の精神が喚起せられるからである。かくて彼等の抵抗は強烈となり、一度び獲得して

るた水準を恢復するばかりでなく、更に進んで、新らしい征服をして尙ほ一段高い水準に達するまでは、彼等は戦ひの手を緩るめない。そして彼等は、能くこの目的を達することが出来る。と云ふのは經濟上の壓迫によつて、彼等の中に喚起せられた反抗の精神は、能く經濟的過程を抑制し、經濟的過程をして、能く自然の進路より轉ぜしめるからである。そこで『社會的進化は、波状を描いて動ごく。そしてこの波状の進路には、次の如き特質がある——即ち一つ一つの波の、峯と谷との相互の間の關係がどうあらうとも、後から後からと來る波の峯は、前のよりも一段高い水準に達するのが常である』。そしてこの波は非常に高くなり、遂には其の峯が社會主義に届くようになる。斯くて社會革命の望みは、一波ごとに消えてゆくのである。

斯う云へば、何も彼も尤もに聞える。議論は大層マルクス主義的である。波の高まつてゆく光景の描寫は美しい。そこでこの推論には、その全體を通じて、資本家的蓄積の殘酷と悲惨との爲めに勞働階級の中に喚起せられた反抗の精神は、資本制度の存續してゐる間にも、能くその經濟的過程を絶えず制限し抑制してゐるといふことを、手輕るに假定してゐるが、人々はこの推論の巧妙に欺かれて、この假定は絶対に證據を缺いてゐると云ふことを、やゝもすれば看過しそふになる。ところが此の推論の一切萬事は、この假定の上に乗つてゐる。そこで此の假定にして一朝倒

れたなら、外殻の破裂と云ふような、マルクスの理解した社會革命に反對して立てられたこの推論は、全部覆へつてしまふのである。尤も『社會學的波動』の發明者が右の記述を以つて、資本制度の下に於いて、労働階級がその境遇を——資本主義的生産と蓄積とを支配する法則の下に於いて可能な範圍内に於いて——改善する道程の描寫であるといふことに満足して、それ以上のことを要求しないなら、吾々は必ずしも、この發明者と論争するつもりはない。即ち言葉を換へて云へば、社會學的波動説なるものが、労働階級の貧困化といふ問題にだけ觸れてゐる間は、吾々は必ずしも、之に反對する積りはない。そして右の範圍内に於いては、此の説は、少しもマルクス説と撞着せぬのである。けれども『社會學的波動』の平和な運動のうちに、『心理學的傾向』によつて經濟法則が廢止せられるとか、乃至は制限せられるとか云ふことになつて來ると、話は全く違つて來る。吾々はこの議論を承認するに先だつて、近世的發達の諸傾向は、資本主義的生産と蓄積との法則を制限してゐるか制限して居らぬかといふ問題、若し制限して居るとすれば、斯ような制限は、全資本制度を濟し崩しに廢止して、何等の外殻の破裂もなしに、能く資本制度を社會主義的制度に變形し得るかといふ問題を、周到に研究しなければならぬ。そして之が爲めには、吾々は資本主義的發展の萬能性に就いての純經濟上の問題と、レライツヨニスト修正論者によつて提出せられてゐる資

本主義の『擴大』、『順應』、『調整』などといふ學說とに立ち返へらなければならぬ。

本書の初の方の一章に於いて、吾々は、資本制度の經濟上の矛盾を詳論した。そして此の研究の結論として、資本主義經濟學の大問題は、資本制度の下に不斷に生産せられる剩餘生産物の處分であると述べた。即ち資本制度の内部に起る一時的混亂の主たる原因は、この剩餘生産物を處分し得ないことである。そしてその結果として、資本制度は究極の破綻を來たし、社會主義的生産方法と分配方法とに處を譲るのである。

ベルンシュタインを筆頭とする修正論者^{レサイジヨニスト}は、資本制度の内部に起る危機に就いても、また其の究極の瓦解に就いても、右の如き結論の正確を疑ふのである。けれども、然らば資本制度の内部に起る經濟的危機の原因如何といふことに就いては、ベルンシュタインは少しも明確なことを言ひ得ない。彼れが吾々に告げるところは、どちらの側からも、すれば議論も随分あるし、又た現に議論もされて來た、そして類似に興味をもつ人々は、此の問題に就いての學說と、他の或る問題に就いての學說との間に、極めて興味ある類似を認めるであらう、と云ふだけのことである。マルクスの恐慌説についても、同じくベルンシュタインは、マルクスは例によつて明白な自家撞着に陥入つてゐると云ふ。そして何故にこの矛盾に陥入つたかと云へば、それは例によつて、この矛盾し

た部分は、相當の時間を隔てて書かれた爲めであると云ふこと以外には、ベルンシュタインは何等の明確なことも、参考になることをも云つて居らぬのである。唯だこの極めて啓發的な教訓のうちで、唯だ一つ異常なことは、第一卷及び第二卷の中の文章は、第三卷中の文章よりも、ずつと以後に書れたものだといふ、正確な記述である。これは確かに『資本論』の第一卷及び第二卷と、第三卷との矛盾と云ふことに基づいて、マルクス説の發達に關する極めて博學な論文を書いてゐた彼れの友人たちを驚かしたに相違ない。なぜならば彼等は、第三卷はマルクスの晩年に於ける一層成熟した判斷の結果であると云ふ事實によつて、第一卷及び第二卷と、第三卷との間の矛盾を説明して居つたからである。そこで肝腎の問題そのものに至つては、彼れの著述を讀んだ者も、何がマルクスの恐慌説で何が修正派の恐慌説（修正派にそんなものがあるならば）なのか、何が何だか、かいかいもく見當がつかぬ。そして彼れの言葉によつて見ると、此の問題については、御當人その人が眞暗闇であることは疑ひがない。けれども其の爲めに、敢えて自分の理解せぬ學説を修正するに妨げぬことは、尙ほ同じような暗中摸索をしてゐる彼れの友人らが、自分の理解せぬ學説を修正するに躊躇せぬのと同じである。

資本主義の經濟的發展の傾向についての、マルクス説に反對して、レヴィイヨニスト修正論者が提出してゐる議

論は、要するに之だけのことになる——マルクスの認めた矛盾は、マルクスの想像するように、資本制度に固有内在するものではなく、單に資本制度の或る形態に伴ふものであり、資本制度の或る形態の結果に過ぎないものである。そして資本制度の或る形態とは、私人的の企業と之れに伴ふ生産の無政府状態とが跋扈する、初期の資本制度である。然るに資本制度の生産からこの無政府状態が無くなると、(そしてこの無政府状態は、近代のトラスト其他の産業上の聯合や合同による生産の組織と整理との結果、消滅する) 恐慌は起らぬようになる。殊に近代の帝國主義の力で、資本家の立場が殆んど無限に擴張することが出来るので、恐慌は起らぬようになる。資本制度の最後の崩壊、即ち社會的革命とは、畢竟、一大恐慌を指すものに外ならぬから、恐慌の原因が取り去られた瞬間に、革命の危険もなくなる譯である。經濟的恐慌が周期的に起るといふ、マルクスの主張した法則が、近代のトラストや帝國主義の結果として明らかに打ち破られ、この世紀の初葉に起つたような恐慌は、近代のトラストと帝國主義の力で見事に喰ひ止められてゐるといふ形勢は、この議論に事實の根據を與へるものである。

363
修正論者の議論は、要するに之だけのことであるが、吾々は之を批評するに先つて、マルクスの恐慌説と、資本制度の範圍内に起る恐慌と、資本主義の全組織の崩壊との間の關係を研究し、

次に資本制度の最近の發展と、其の相互關係とを研究しなければならぬ。

マルクスに従へば、恐慌には二つの異つた原因がある。其の一つは、商品交換の行爲が、二つの別々の行爲に分かれたことである。即ち貨幣が普遍的商品として、また交換價值の一般的の容器として用ひられるようになった結果として、商品の交換の行爲が、甲といふ商品を貨幣に交換することゝ、この貨幣を更に乙といふ商品に交換することゝの、二つの行爲に分かれたことである。斯ように交換行爲が、時を異にした二つの獨立した行爲に分かれたので、恐慌の可能性が來たのである。なぜならば、この二つの行爲の間隔が餘りに離れて來ると、生産の齒車は停止し、市場は滯貨で一杯になり、その結果は恐慌となるからである。然るに普遍的商品として、また交換價值の特別の容器としての貨幣の特殊な性質——價值が實現され、價值が現實的のものとして保存せられるのは、唯だ貨幣といふ形態を取つてゐるから、斯ような性質を持つてゐる結果、勢ひ貨幣は憧憬の的となる——の結果として、恐慌の可能性は轉じて蓋然性となる。いふまでもなく、資本は剩餘價值の創造といふ、その職分を果そうと焦つてゐる。そして剩餘價值の創造に焦つてゐる結果、資本はその中に結晶せられてゐる價值を、危険な形態に變形し、之が爲めにその價值が疑はしいものとなり、遂には其の一部分を喪失するような冒險をやる。が然しそれにも

拘らず、元來資本は臆病であつて、少しの混亂にもすぐ驚いて、^{から}鼓の中に引つ込んでしまふ。ところが生産が權衡を失ふことに、この混亂が起る。そして今日のような私人的の生産と競争制度の下では、生産が權衡を失ふことは珍らしくない。然るにこの蓋然性は、信用制度の爲めに一層強よめられてゐる。即ち今日の信用制度は、一面には資本を、混亂に對して恐ろしく敏感にし、生來の臆病を一層甚だしくする。然るに他面には、財界の混亂と恐慌のどさくさに、投機で儲ける機會を大きくする。

商品の流通過程から起るこの種の恐慌は、いふまでもなく『生産の無政府状態』から來るものであるから、『生産の無政府状態』がなくなれば、此の種の恐慌も無くなる譯である。但し之は資本制度を存續しておいて、尙ほ且つ『生産の無政府状態』が除去せられるものと假定してのことである。従つてトラストや産業上の聯合や合同によつて、斯ような無政府状態を廢して生産の調節が行はれ得るものとしたならば、最早や斯ような原因の爲めには商業上の恐慌は起らぬといふ、^{修正}修正論者の主張は正しいことになる。そこで彼等の誤謬は、マルクスは生産の無政府状態を以つて、恐慌の唯一の原因と認めたかの如く速斷するところにある。吾々が上に述べた恐慌の原因は、マルクスによれば、恐慌の唯一の原因でないばかりでなく、^{主たる}主たる原因でもないことは、明白な事

實である。これは單に、論理上の問題として見ても分かる筈である。そして經濟上社會學上の問題を、單に論理的に取り扱ふことは、修正論者の或る人々の珍重する方法なのである。なぜならば『生産の無政府状態』といふことは、その性質上、不規則な要素であり、従つてこの不規則な要素が、規則正しく回歸する恐慌の原因となり得る筈はないからである。しかしマルクスは、彼れが何を以つて資本制度の下に於ける、恐慌の主たる原因と認めて居るかについて、少しの疑ひの餘地をも残して居らぬ。

即ちこの原因は、吾々が前に指摘したような、資本制度に固有する矛盾である。即ち労働者が一方には自己の労働力の賣手であり、他方には自己の労働の生産物の買手であるといふ、二元的の立場に立つて居ることである。そして其の結果として生ずる剰餘生産物の創造は、『生産の無政府状態』といふことゝは全く離れて、こゝに商品の生産過多を起さざるを得ぬといふことである。そして恐慌が不斷に起るのは、この不斷の要因、即ち剰餘生産物の不斷の累積によるものである。斯ような好況期と沈滞期とが交るゝ來ること、詳言すれば社會の生産力が許す限りの程度に、また社會の生産力が必要とする程度に、斷えず生産を持続することの出來ぬこと、これぞマルクスの恐慌説の根底をなすものである。であるからツガン・バラノフスキーが、英國商業恐慌史のう

ちに示したように、^{レヴィイジョニスト}修正論者の指摘した事實——恐慌の回歸する圈の形は變つて來た、即ち急激な瓦解の前に、熱狂的の活氣を呈してゐたものが、今では好景氣と不景氣との、緩るやかな満ち潮退き潮があるといふ事實——はマルクス説の反駁ではなくて、資本制生産に對する彼れの分析の正確を確かめたものである。そして此の事實は、近代のトラストや聯合や合同などの結果と見られてゐる。そこで此の事實は、トラストにせよ産業上の聯合や合同にせよ、又は其の他の生産調節の影響にせよ、到底、恐慌を無くすることは出來ぬといふことを、決定的に立證してゐるのである。なぞならば、それは恐慌の主たる原因——生産の調節が缺けてゐる爲めではなくて、資本主義の生産方法に固有内在する生産過多——を除去することが出來ぬからである。トラストや産業上の聯合や合同が、何等かの影響を與へ得るとしたところで、それは恐慌の起る形に影響を與へ得るに過ぎぬ。即ち恐慌が往時の如く短日月にして急激であるか、それとも今日の如く、緩やかで且つ長引くかといふことである。そして唯だそれだけのことである。之はツガン・バラノウスキー自身すらも認めてゐる。

近代の産業上の聯合や合同が、調節的影響を與へる結果として、恐慌が従前のように激烈でなくなつたのを見て、マルクス批評家の或る者は喜んでゐる。しかし吾々は、短日月の恐慌より

も長期間の不景氣の方が、どこが善いのかを知るに苦むものである。どこが善いかと云ふのは、固より労働者の立場に立つてである。ツガン・バラノウスキー自ら指摘してゐるように、産業循環圏（好況期と沈滞期との）の性質が變化したために利益を蒙つたのは、資本家階級だけであつて、労働階級はその爲めに、一層悪くなつたのである。

斯ような産業循環圏の性質の變化を見て、彼等が有頂天に喜ぶ主たる理由——少くとも其の理由の一つ——は、恐慌の烈しさが減すれば、最後の大恐慌——即ち社會革命——が起る可能性も無くなると信ずるからである。そして急激な大破綻以外の徑路では、彼等は社會革命を想像し得ぬのである。しかし斯ように資本制度が、大激變的に倒壊するといふことは、必ずしもマルクス説に含まれては居らぬ。少くとも、マルクスの恐慌説とは無關係である。そこで若し社會革命が來るには、恐慌の影響が必要だと假定しても、商業上の恐慌の烈しさが減じて來るといふことは、少しもその革命的の影響を減ずるものではない。なぜならば恐慌が労働階級に與へる影響といふ點では、この救治法は、病氣そのものよりも一層悪いからである。尤も革命とは、飢えた絶望的の暴民が、仕事と食物と住居との目前の缺乏の爲めに、狂亂と破壊に驅られた上での仕事と思ふてゐる人々に對する影響は、別問題である。産業循環圏の一つの時期から他の時期への變化、

即ち好況期から不況期、不況期から好況期への變化が、急激でなくなつたことは、その爲めに生ずる悲惨の分量を減ずるものでもなければ、また資本制生産の矛盾が減じたことを示すものでもない。であるから社會革命なるものを、一切の經濟的活動が一時に停止するものと思はぬ以上は、それは少しも、社會革命の蓋然性に影響するものではない。そこでほんとの問題は、恐慌が激烈でなくなつたかどうかといふことではなくて、恐慌を惹き起す經濟上の矛盾が、幾らか激烈でなくなつたかどうかと云ふことである。そこで吾々は、資本主義生産制度の順應性と膨張性とといふ問題に當面するのである。

資本制度は、帝國主義の大海に乗り出した爲めに、新しい壽命が出来たとは、修正論者の保證するところである。しかし彼等のうちの何人も、此の問題を充分に研究して、斯ような推定には事實の上の根據があるかどうか、そして若しこの推定が正しいとしたならば、この新壽命はどれだけ續づくものであるかを論定しようとした者はない。ベルンシュタインも肝腎のところでは遁けてゐる。彼れは忠實に虛無主義的日和見主義の本能に従つて、この問題をそのままに残してゐる。ところが其れにも拘らず、彼れと彼れの友人とは、如何にも此の問題をまともに取り扱つて、解決がついたかの如き口振りをして憚らぬ。

然しながら此の問題を周到に考究したならば、抽象的の理論としても、また具體的の事實の上でも、帝國主義は疑ひもなく、資本制度の壽命を延ばしたには相違ないが、資本制度を救ひ得ぬといふことが明かになる。若し資本制生産に對するマルクスの分析が正確であり、そして資本制生産は、労働者がその労働の生産物の中から受ける配け前がますます減少する結果として、ますます生産過多が甚だしくなるといふ、生れつきの病氣に罹つてゐるものとしたならば、單にこの制度を新しい領分に擴張すること、之れを救ひ得ぬことは、論理の當然の歸結である。なぜならば此の場合にも、資本制生産はその死病を携へて新領地に往くからである。そこで帝國主義は、結局たゞ、資本制度の擴大といふことに歸着する。なぜならば資本制度は、新領地を自分自身の生産組織の一部分にせぬ限りは、その生産物の爲めに、新市場を開き得ぬことを忘れてはならぬ。資本主義はその商品の爲めに、新しい得意先きを作る過程そのものによつて、是等の商品の生産事業に競争者を造つてゐる。之れは資本主義の呪咀である。そして舊式の殖民政策と新式の殖民政策との相異は、こゝにある。舊るい意味での殖民地屬領や殖民地帝國が、ほんの一時的の段階としてより外は、最早や不可能となつたのも之れが爲めである。勿論この段階にある間は、剩餘生産物に持て餘ましてゐる母國に取つて、殖民地は幾らかの救濟となるに相違ない。けれども赤ん

坊の殖民地はずん／＼成長する。そして資本主義が壯年に達する頃には、子供は恐らく早熟して、やがては形勢の險惡を『擴大』するに過ぎぬものとなる。

事實は以上の推論を裏づけてゐる。しかし事實の研究に進む前に、吾々は反マルクス經濟學文

書の光輝たる、ツガン・バラノウスキー教授(前にも言及した)に敬意を拂はねばならぬ。ツガン・

バラノウスキーの眞實の學者的識見は、彼をして、その他の修正論者レヴィヨニストの有象無象と聊か選を異に

せしめてゐる。彼はこの學者的の識見をもつて、マルクス説は『順應』とか『擴大』とか『膨張』とか

いふような、そんな不精確な無意味な言葉で覆へし得ぬことを觀取した。彼はマルクス説の構造

は、そんな攻撃法で毀はれるには、餘りに堅固に、餘りに完備した建築物であることを見た。そ

して假りにマルクス説に有效な攻撃が加へられるものとせば、それは唯だマルクス説の根據に向

つてのみ、有效な攻撃を加へることが出来るといふこと、そして唯だ、マルクス説の建築に用ひ

られた方法と、同じ方法によつてのみ、有效な攻撃が加へ得るものだといふことを見た。そこで

彼れは資本主義的生産の分析によつて、マルクス説の主張するような、必然的の生産過多といふ

結論には達せぬことを示そうとした。この努力の結果が、即ち彼れの『生産の分布』といふ學說で

ある。この學說によると、若し年々の生産額のうちから、必ず一定額だけは『生産手段』の形を取

る配け前となり、そして此の額は断えず増加してゆくように生産を調節したならば、生産過多は決して起らぬといふことになる。私は他の場所で、この學説が全くの不合理であることを示したが、それにも拘らず尙ほこの學説は、恐慌と生産過多に關するマルクス説を論破しようとした、修正派の唯一の學者らしい企てであることは否まれぬ。ツガン・バラノウスキーがこの企てに敗れたのは、彼れの罪ではなくて彼れの運命である。そして之れほどまでに丹精した學説が、一片の噤言たわごとに過ぎぬといふことは、彼れの運命を一層悲惨にした。なぜならば、ツガン・バラノウスキーは鋭利な理論家であるばかりでなく、實際生活上の事實に對する、炯眼な觀察者だからである。然しながら私が他の場所で述べた通り、彼れも亦たその時代の病氣に罹つてゐる。即ち『倫理的』たらんとする病的な憧憬と、『實際的』たらんとするヒステリックな追求といふ、當時の時代病に罹つてゐる。『倫理的』たらんとする憧憬は、『非倫理的』なマルクス説から彼れを引き離し、一切を包容する學説の確かな道案内なしに、漂浪するに任かした。斯くて彼はその鏡どい視力を遮ぎる、孤立した一つの事實にかぢり附いたのである。

ツガン・バラノウスキーが其の學説の基礎とした事實は、吾々がさきに、吾々の學説を確めるものとして引用したその同じ事實である。即ち其の事實といふのは、資本主義の面積は膨張すると

いふこと、そして生産される商品の點では、生産が變化した——即ち今日では、主要資本主義國は、從來の如き消費品を生産しないで、機械や其他の『生産手段』を生産するようになった——と云ふことである。ツガン・バラノウスキーは此の二つの事實から結論して、社會が年々生産する生産額の内、消費品の割合は不斷に減少し、『生産手段』の割合は不斷に増加するのが法則である、そして若し生産年額の中の生産手段に當てられる分量と、消費品となる分量との間に、何時も適當な比例が保たれるならば、生産過多は永久に起り得ぬと論定したのである。

この結論は正確であらうか。最も強い意味で、否なである。ツガン・バラノウスキーは、年々多額の『生産手段』が、主要資本主義國によつて生産せられてゐるのを見た。彼はこの大なる事實を畏敬した。彼にしてほんの今ま少し事實を輕視して、今ま少し理論を重んじたならば、それは何故であるか。そして何の爲めであるかと自問せしめたらう。そして其れはまた彼をして、この事實と他の事實との間の關係をも研究せしめたらう。そして何よりも先づ、彼れは是等の『生産手段』が、何に用ひられてゐるかに着眼したであらう。そして彼にして此の點に着眼したならば、是等の莫大な『生産手段』は、之れを生産した資本主義國で用ひられては居らぬことに氣がついたらう。尤も之には幾らかの例外がある。が、それは後節に説明する。そこで是等の生産手段は資

本主義で生産され、謂はゞ資本主義化の進行しかけたばかりの國々に輸出されてゐる。そこで彼は資本主義國に於ける剩餘生産物が、今のところ、永久的に生産の齒車を止めぬのは、生産物が消費品と生産手段との間に賢明に分配されるからでもなく、また消費品の生産から『生産手段』の生産に變化した爲めでもなくて、資本主義の國々は今日までのところでは、或る者は早く資本主義的に發達したので、そこには尙ほ資本主義的に後くれた國々がある爲めに、自ら消化し得ない生産物は、綿製品であらうが鐵製品であらうが、投げ賣りの出来る他かの世界がある爲めだと云ふことが分つた筈である。斯う云つたからとて、最も進歩した資本主義國の主要生産物が綿製品から鐵製品に變化したことに、重要な意味がないといふ譯ではない。否な反對に、それは最も重要なことである。しかし其れはツガン・バラノウスキーの認めた意味とは、全く別の意味に於いてである。即ちそれは資本主義の終りの始まりを示すものである。資本主義の國々が消費用の品物を輸出した間は、それ等の國々では、資本制度には尙ほ望みがあつた。然し資本主義ならざる外の世界が、資本主義的に生産された品物を消費するどれだけの能力があり、そして其の能力が何時まで續づくかは分らない。最も進歩した資本主義の國々の輸出が、消費品に減じて機械類に増加することは、會ては資本制度の圏外にあり、従つて資本制度の剩餘生産物の投げ賣り場所となつ

てゐた領域が、今や資本主義の世界に引き込まれたことを意味してゐる。即ち彼等自身の資本主義が發達したので、彼等自身の消費品を生産するようになったのである。しかし彼等は、尙ほ資本主義的發達の初步にあるので、資本主義的に生産された機械類を必要とする。しかし彼等は、やがては之れすらも必要としなくなつて來る。彼等は今ま、自分自身でその綿製品や其の他の消費品を生産するようになった如く、その通りに、やがては鐵製品をも生産するようになる。そうになると最早や彼等は、今日唯一の資本主義國たる國々の剩餘生産物の捌け口でなくなるばかりか、彼等自身の剩餘生産物を生産して、その賣捌きに困るようになる。

若しツガン・バラノウスキーが、資本家的慣行の細かな點に視力を妨げられなかつたなら、當然觀取したらうと思はれる事が他かにもある。そして是等の事柄を觀察したならば、彼は資本主義的發達の最近の段階の、『眞實の本性』を瞥見することが出來たらう。例へば資本主義國で生産され、そして直接輸出せられぬ莫大な『生産手段』は、其の國々に於いて、輸出せられたと同じ結果を來たすような方法で用ひられてゐることに氣が附いたらう。即ち資本主義國から非資本主義國への輸出を助ける爲めの、大陸横斷鐵道や大洋聯絡運河の開鑿、汽船航路の開始などがそれである。更に斯のような『公共的の改善』が、全然、資本主義の界限内——即ち資本主義國の間だけ——

で用ひられる場合にも、（莫大な『生産手段』は斯のような目的に用ひられてゐる）、それは尙ほ多額の剰餘生産物を、ほんの一時的にもせよ、市場から取り除く特殊な働らきをする。此の種の生産手段の特質は、それが全く完成した上で、或る時期の間運用されて見ないと、果して有用であるか無用であるかと確言できぬことである。そこで此の種の『生産手段』は、實際の必要がないのに常に多量に生産されてゐる。そして純然たる投機的目的の爲めに生産されて居ることも、屢々である。斯のような『生産手段』が完成するには數年を要するので、其の間は資本主義的生産の車輪は、故障なしに氣持よく回轉する。そして出來上つた上で、この仕事が全然または一部分、全く無用なものとなつても、または是等の生産によつて創造してゐるつもりの價值が——少くとも其の大部分が——結局實現されないものであつても、一向お構ひないのである。そこでツガン・バラノウスキの如き資本主義の賢人たちは、氣持よく回はる車輪の歌に耳を澄ましつゝ、『生産手段』の無限の連鎖をめぐる資本主義の無限といふ、結構な夢を見て居るのである。勿論、驚いて目を醒まさねばならぬ時が來る。是等の『生産手段』の生産は、全くの徒勞になる。しかし其れは又た、別の話である……

この點の重要なことを理解する爲めには（そしてこの點は、右の如き性質をもつた『生産手段』

には、それが資本制度の界限内で用ひられると、又は界限外に輸出されるとに拘らず、均しく適合する、吾々は唯だ、ツガン・バラノウスキー！自身の『英國恐慌史』を参照するを以つて足れりとする。この書物のうちに集めてある事實のうちで、茲に考察してゐる資本主義の最近の段階に關係したものは、極めて有益な教訓を與へるものである。この教訓は、苟も是等の事實に現はれた全體の形勢を大觀する者に取つては、看過すことの出来ないものであるが、肝腎のツガン・バラノウスキーは、自分の記述した過程の細かな點にのみ捕はれてゐたので、この教訓によつて教へられなかつた。要するに『生産の分布』といふツガン・バラノウスキーの學説は、彼れの著書が教へてゐる大なる教訓——資本制度は浪費によつて生存し且つ榮えてゆくといふこと——を見落した結果である。

ツガン・バラノウスキーは『近代』の最初の恐慌、即ち一八五七年の恐慌について、『英國恐慌史』のうち斯う書いてゐる——『一八五七年の恐慌の特徴は、この恐慌の全世界的性質によつて説明することが出来る……一八五七年の恐慌と、一八二五年と一八三六年との恐慌との間の特徴的の相異は、この恐慌は前年の二つの恐慌のように、綿絲業に最も甚しい打撃を與へないで、鐵工業に打撃を與へたことである。こゝに資本主義生産方法の新特徴が現はれてゐる。即ち世界市場の

上にも一般經濟生活の上にも、生産手段の働らきがますます重要を加へて居るといふことである。取引の沈滞は工業家をして、其の商品の販路の爲めに新市場を求めしめるのが常である。此の點に於いては、一八五七年の恐慌は極めて強大な影響を與へた。英國から米國への輸出は、一千九百萬磅（一八五七年）から一千四百萬磅（一千八五八年）に減少した。然るに英國から東印度への輸出は、一千百七十萬磅（一八五七年）から一千六百八十萬磅（一八五八年）に増加した。即ちヨーロッパとアメリカとの市場に受けた打撃を償ふ爲めに、英國の資本はアジアに移住した。そこで東印度には鐵道の布設、内國交通機關の改良の時代が來た。そして其の結果は、英國商品に對する需要を増加したのである。』

吾々は茲には、一八五七年の恐慌以後、今日に至るまでの恐慌の詳細を繰り返へすことは出來ぬが、ツガン・バラノウスキーの著書のうちの、この極めて興味ある部分を周到に研究することは甚だ有益である。要するに一八五七年以後のすべての恐慌は、『生産手段』の生産過多によるものであつて、殊に最も耐久力のある主要生産手段の生産過多——之を生産するには最も長時間を要する生産手段や、交通機關や、公共的の改良の如きものゝ生産過多——によるものであつた。そしてこの標本的の恐慌は、次の如き徑路で起つたのである。

出發點はその前の恐慌である。ツガン・バラノウスキーが、前に引用した一節に云つてゐるように、『取引の沈滞は工業家をして、其の商品の販路の爲めに新市場を求めしめるのが常である』。そして是等の商品が、多くは生産手段であることも、彼れの觀察した通りである。言葉を換へて云へば、恐怖後には、投機の途を求めてゐる資本が有り餘つてゐる。ところが普通の事業、殊に内國の事業界は一杯になつてゐるから、資本家は彼等の資本を有利に使用することの出来る、新しい舞臺を求めらる。しかし今日の社會の消費能力は限られてゐるので、此の上新らしい消費品を製造したり、又は此の種の消費品を製造する爲めの機械を製造しても無益だと云ふことを知つて居るので、彼等は新しい文明を造りだして新しい需要を呼び起こそうとする。由來、文明は結構なお得意先きである。そして資本家は難局に陥入ると、何時でも本能的に、文明の力を借らうとする。そこで文明の鐵の絲は、國內と國外とで——それも多くは國外で——紡ぎだされる。資本主義の傳道精神は、人のよく知るところである。その結果は資本と労働に對する、莫大な需要を生じる。何も彼も活氣づいて、前途は輝やいてゐる。生産の車輪を妨けてゐた剩餘生産物は工場から取り除かれて、取引は復活する。好景氣の時代は始まつた。『文化』運動が猛烈であり、殊にその完成に長く掛かれば掛かるほど、そしてその効果が擧がれば擧がるほど、景氣はそれだ

けよく、それだけ長が持ちがする。しかし何時かはこの運動も完成して、遂には收穫をしなけれ
 ばならぬ時が来る。斯うなつて見ると、この運動の失敗だつたことが分つて来る。折角鐵道の出
 來上つた頃には、運搬すべき物が無いので、要らぬ所に布設されたことになる。事業は破産する。
 莫大な資本の額、生産手段の光輝ある殘骸、今はすべて浪費を意味してゐる。なぜならば配當を
 生ぜぬ資本は、資本家的法則によれば、資本ではないからである。そこで恐慌になる。どちらを
 向いても、何も彼も微塵に碎けてゐる。恐慌の及ぶところは、或る特定の企業に關聯した範圍に
 止らぬ。と云ふのは第一に、近代の資本主義的企業は、特に信用制度の結果として、非常に廣く
 且つ複雑に絡み合つて居り、苟も何處かに重大な龜裂が出来れば、勢ひ必ず、全組織の根底が崩
 れるようになつて居るからである。第二には、無用になつた『生産手段』の生産に用ひられてゐた
 多くの人々は、今や職業を失つたので労働市場を壓迫し、傭主に救濟を求めらるからである。そし
 て第三には、大仕掛けの『生産手段』の生産が引き續つて行はれるにつけて、如何にも景氣のよ
 さそうな外觀を呈するので、この特定の企業と、少しも直接關聯して居らぬ領分に於いてすらも、
 生産は一般に、危険な程度に膨張してゐるからである——そこで恐慌といふことになる。

ところがツガン・バラノウスキーが以上の事實から推定した結論は、甚だ奇妙なものであつて、

現代の精神病理學上の、好個の實物教育となるものである。しかし茲にはこの方面の議論を、これ以上に辿つてゐる譯にはゆかぬから、吾々は何時かまた、極めて興味あるこの議論に立ち歸へりたいと思ふ。そこで茲には以上の事實から、吾々自身の推論を試みたい。然しそれとても、吾々の本來の問題に關係のある範圍に於いてのみである。ツガン・バラノウスキーが引證した事實ばかりでなく、同時にまたツガン・バラノウスキー自身の記述を見ても、先づ第一に吾々の心に浮ぶ争ひがたき斷定は、生産を適當に分布することによつて資本制度は永久に存続させ得るといふ彼の學説は、こけの骨頂だといふことである。一八五七年以前に、當時、資本主義國の主席であつた英國では、生産の『分布』に一變化が起つた。綿製品(即ち消費品)の生産は下位に墮ち、鐵製品(即ち生産手段)が第一位を占めた。即ち言葉を換へて云へば、生産過多から起る恐慌を如何にして防止すべきかといふ、ツガン・バラノウスキーの忠告通りにした譯である。然るに彼れの專賣特許の救済策が講ぜられたにも拘らず、一八五七年の恐慌は襲來した。そこで彼れの救済策に對する、資本家の信仰が聊か動搖したことは疑ひない。その證據には、彼れの云つてゐる通り、資本家は同一市場(ツガン・バラノウスキーの學説に従へば、この市場は永久に生産手段の過剩を生ぜぬ筈である)を目的として、引き続き生産手段を生産する代りに、彼等は、新市場を求めだした

のである。唯だ彼等がツガン・バラノウスキーに聽従してゐる點は、『生産の分布』といふことだけである。即ち彼等は依然として、生産手段の生産を選んだのである。けれども其れにも拘らず、恐慌は依然として規則正しく襲來した。そして貧弱な資本家は、狂亂の態で空しく新市場を求めた。言葉を換へて云へば、新市場も直ちに、生産手段の在荷過多となつたのである。しかし之は當然のことである。なぜならば生産手段（このうちには交通機關をも含む）は、要するに消費品生産の手段に外ならぬからである。これ等の生産手段によつて、究極は生産せらるべき消費品に對する需要の無い所では、これ等の生産手段の生産は、即ち生産過多なのである。そして究極の試験がされて見ると、それが分つて來る。そして資本家らはツガン・バラノウスキーよりも先きに之を觀破した。といふのは、彼等には資本主義の健全な狼の本能がある。そしてこの本能はお伽話で養つておく譯にはゆかず、必ず高い配當で飢餓をなだめる必要があるからである。彼等は最早や、行詰りの状態にあることに氣が附いた。豫備の市場も無くなりかけてゐる。然るに現に搾取してゐる市場は絶望的に在荷過多となつてゐる。そこで彼等は、残つて居るものを成るべく多く取らうとして、食物を争ふ野猫のように、互ひに鬭争し始める。資本主義は傳統的の自由貿易政策を棄て、今日の蠻的な帝國主義の時代が始まつた。

近代の恐慌と近代の帝國主義とは、極めて有益な研究の題目である。マルクスの云つたように、恐慌は單に、資本主義の内部に働らいてゐる矛盾の徴候に過ぎぬものであつて、病氣がいよいよ激しくなつた時に、病狀を緩和する手段となるものである。恐慌は病氣そのものではなくて、單に、病氣のあることを示すものである。帝國主義も其の通りである。事實上、近代の恐慌と近代の帝國主義とは、同じ條件の表はれであり、同じ過程の二つの方面に過ぎぬ。恐慌と帝國主義とは、資本制度が如何に浪費によつて存續してゐるかを示してゐるものである。

資本制度の浪費には二つの種類がある。即ち日常の浪費と非常時の浪費である。日常の浪費は最も重要である。なぜならばこの方が、一層廣く行はれてゐるからである。しかし吾々に、資本主義の生命力を見せしめるものは、非常時の浪費である。従つて茲では、其の方に一層の興味がある。そしてこの非常時の浪費こそ、恐慌と帝國主義となつて現はれるものである。如何に帝國主義が資本制度を恐慌から救ひ、そして剩餘生産物の爲めに新市場を供給して、恐慌を絶滅する救主であると觸込まれたかは、既に吾々の述べた通りである。論者は二十世紀の初めに襲來するものと豫想せられてゐた、大恐慌の來なかつた事實を指摘する。そして之は近代の資本主義國の帝國主義的政策によつて、新市場が開けた爲めだと主張する。或る意味では、之は事實である。

恐慌の結果は、社會有機體が吸收することの出來ぬ剩餘生産物の破壊であり、市場から剩餘生産物を取り去ることによつて、再び順當な生産が續けられるようにするものであるから、苟も之と同じ結果を齎らすものは、一時は恐慌の代用となることが出来る。例へば大戦争には、同一の効果があつた。普通には、戦争は恐慌を引き起すかの如く思はれてゐる。固より或る特殊な形勢の下に於いては、殊に信用關係の結果として、開戦の布告は差し迫つてゐた恐慌を早やめたり、時としては財界の恐慌を惹き起すことすらもある。しかし戦争の普通一般の影響は、その正反對である。大戦争は恐慌を喰ひ止めるのが常である。なぜならば大戦争は經濟上、恐慌と同じ結果をもつものであつて、恐慌に代用し得るからである。大戦争の後に好況期のつゞくのは、大恐慌の後に、大景氣の時代が來ると同じ道理である。戦争が長びけば長びくだけ、そして實際の財産と可能的の財産との破壊が甚しければ甚しいだけ、其の跡には大なる好景氣が續づくのである。

帝國主義的政策は、其の結果として來る戦争は別としても、同じ効果を有するものである。そして帝國主義的政策が資本主義に有利なのは、この爲めである。帝國主義に非常な人氣のある經濟的理由としては、新市場に對する渴望と、實際にこれを獲得することばかりではなくて、新市場を求めるといふ政策そのものゝ經濟上の原因をも算へねばならぬ。之を實例で説明すると、

最近米國の大統領選舉の際、反帝國主義者は、フィリッピンを領有し且つ支配する爲めには、同島との通商總額以上の費用が掛るといふ事實を示したエトワアド・アトキンソンの編纂にかゝる統計を、大いに利用した。反帝國主義者は、一弗だけの品物を賣る機會を得る爲めに、一弗の費用を拂ふのは、馬鹿の骨頂であると主張した。成るほど彼等自身の商店の主人的見地から見れば、之は疑ひもなく眞理である。けれども生産手段を生産する現代資本主義の見地から見れば、そうでない。そこには屢々、どれだけの費用を掛けても、商品の手を抜かねばならぬ時が来る。是等の商品は、生産手段から成り立つてゐるので、慈善の爲めに労働者に呉れる譯にもゆかねば、それかと云つて、西部や南部の農業者や殖民者が、豊作の時には價格吊り上げの爲めに收穫の一部分を燒棄するように、燒き棄てゝしまふことも出来ぬ。是等の品物は資本であるから、賣るか乃至は『投資』する外には、手を抜くことが出来ぬ。そこで新市場を求めて熱狂する。それだけではない。資本制度の安全といふ上から見れば、またそれが『この國全體の繁榮』——耳觸りの良いように斯う云はれてゐる——に影響する上から見れば、フィリッピンに品物を賣る爲めに費やされた幾百萬弗は、浪費ではなくて利益なのである。この幾百萬弗は、米國の資本家が、軍隊や役人などの、不生産的消費の爲めに賣つた幾百萬弗の品物を代表する。これは取引の車輪を停止しよ

うとする剩餘生産物の手を抜く爲めに、常に有利ではないが有効な方法である。之が徹頭徹尾、浪費であることは事實である。けれども資本制度は、今や浪費によつて其の存在を續づけてゐるのである。

序でに云つておかねばならぬことは、右の如き方法で、また右の如き目的で——少くとも右の如き結果を齎らす爲に——浪費せられたのは、單に直接に費消せられた金銭ばかりでないことである。直接殖民地の出費の上に、斯ような帝國主義的政策の爲めに必要となつて來る近代國家の一般軍事費を計上しなければならぬ。一國の軍事上の『必要』の爲めに費消せらるる經費は、一錢一厘までも、純然たる浪費である。けれども浪費であると同時に、資本制度の存續の爲めには、絶對の必要事である。尙ほ其の上に、この計算に入れなければならぬのは、單に是等の『必要』の爲めに費やされ、そして政府の豫算に計上されて居る金額だけではない。是等の人々は、日常の生産から取り去られたものである。彼等は日常の生産界に居れば、勞働市場に他人と競争し、彼等の生産した生産物は、遠方の國に賣らるべき剩餘生産物の總量を膨張させたらう。一人の人間を軍事上(有ゆる種類の經理上の任務をも含む)の目的で生産界から取り去る事は、勞働市場から一人だけ輕減する。そして之と同時に、この一人の人によつて消費せられる品物に對する、

需要を作り出す。そして是等の品物は、有用な職業に残つてゐる他の人々によつて生産せらるべきものである。そこで好景氣が引きつゞく。浪費は資本主義の安全瓣である。

しかし何時まで之か續づくだらう？。疑ひもなく、永久ではない。剩餘生産物は、若し浪費——上に述べたような性質の浪費——によつて手を抜くの外はないとしたならば、そして此の種の浪費によつて處分しなければならぬ剩餘生産物は、不斷に増加してゐるとしたならば、吾々は何時かは、之を處分することが、物理的に不可能となる時期に達することは明白である。但し『物理的に』といふうちには、勿論吾々は、人間の天性をも考慮に入れて居る。人間の天性は、吾々の社會組織の『物理』の一部だからである。然しながらマルクスに従へば、資本主義は斯のような『物理的』の破綻が起るまで存続するものと臆斷するのは、根據のないことである。この最後の破綻説は、マルクス批評家によつて、今日まで大に利用せられて來たが、それは要するに、彼等がマルクスの哲學と、マルクスの哲學とその經濟學との關係について、傷ましくも無智なる結果である。現にツガン・バラノウスキすらも、資本主義から社會主義への變形は、マルクスの哲學に従つて、經濟上の必然として起るべきものならば、資本主義の下に生産を無限に繼續することの不可能を立證しなければならぬと云つて居る。そこで彼は、資本制生産を分析した結果、絶対に不

可能といふことにはならぬといふことを立證しようとして、大に努力したのである。しかしこの臆断は、全然間違つてゐる。マルクスの哲學は必ずしも、經濟上の不可能に到達することを必要とせぬ。これは唯物史觀を機械史觀と穿き違へてゐる人々が、想像の裡に築づいた空中樓閣である。

マルクスの哲學はそんなものではない。マルクスはその歴史哲學の梗概を述べるに當り、社會革命の原因を記述して、法律その他の上部構造が生産を幫助する手段たることから、生産を拘束する足枷に變じた場合には、革命が起ると云つて居る。彼れは革命が起るまでには、舊制度の下に於ける生産が、不可能とならねばならぬとは云はぬ。之に反して、彼れの學說に従へば、『足枷となる』ことで澤山なのである。そして茲に論じてゐる特定の革命——即ち資本主義から社會主義への革命——については、彼れは『資本の獨占が、資本の獨占に伴ふて起り、そして資本の獨占の下に之と相ひ伴ふて榮えた生産方法の足枷となつた』時、『資本主義的私有財産の吊鐘が鳴る』と云つて居る。そして此の時、『生産手段の集中と労働の社會化とは、遂にその資本主義的外殼と兩立すべからざる點に到達する』のである。マルクスの哲學に従へば、或る生産制度は、それが社會の生産力の發展と充分な利用とを助ける間だけ、少くともそれを妨げぬ間だけ、存續するこゝとが出来、そしてそれが生産の障害となり、足枷となるに至つた時、他の制度に所を譲らねば

ならぬ。或る制度が生産を妨げ、且つ既に生産したものを浪費しなければ存在の出来ぬ場合に立ち至つた時、この制度は、既に生産の障害となり足枷となつてゐるものであることは云ふまでもない。であるから斯ような制度は、純機械的には存続が可能であらうが不可能であらうが、それとは全く離れて、最早や長持ちはせぬ。斯ような制度は、よし機械的には尙ほ存在し得られるにもせよ、歴史的には、既に不可能となつてゐる。資本制度がこの點に達してゐることは、吾々の觀察した通りである。資本制度は消滅しなければならぬ。

第十一章 結 論

吾々は今まマルクスの推論の頂點を仕上げ、彼れの理論的構造といふ建築物の屋根を葺きおへた。そして其れは今や吾々の眼前に、十九世紀の最も偉大な思想家の記念柱、鬭争のうちにある人類の炬火として、完成した形で立つてゐる。けれども、吾々に最も多く関係のあることは、この建築物の宏大ではなくて（吾々の任務は、マルクスその人の功績と天稟とを讚美することではないから）この建築物の性質であり、その各々の部分と全體との關係である。吾々は本論の初めの方に、マルクスの學說體系は一個の堅固な構造であつて、一個の完體として見、そして其の全體を受け容れるか全體を否認するかでなければ、適當に理解し得ぬといふことを述べた。吾々はせめて此の立言の證明だけにでも、成功したかつた。マルクスの學說體系の功績に就いて、吾々がどんな判斷をしようとも、唯だ一つ、疑ひの餘地のないほど明白に決定したいことは、これである。ヤコブが枕にした石のように、マルクスの學說體系を築づき上げてゐる色々の分子は、優ぐれた力によつて、一個の完體に結合されたといふことである。遠い過去の説明から、現在の相

い闘ふてゐる勢力の理解を通じて、未來の太陽の昇る光景に至るまで——文明の歴史的進行の法則を宣言した『經濟學批評』の序文から、資本制度を支配する價值法則の紛糾と機微との間を経て、老衰した資本制度を送り、新しい活力に充ちた社會主義的社會を迎へる鐘の響きに至るまで——マルクスの築づいたこの巨大な建築物は、一枚の石で刻まれてゐる。その土臺は過去に横はり、その骨組は現在を包容し、その尖塔は未來を貫ぬいてゐるのである。

マルクスの社會主義は、唯だに現在の社會制度の下に於ける、壓制者に對する憎惡と、被壓制者に對する愛との結果だけではない。また熱烈な想像力の、夢のような空中樓閣でもない。それは人類文化の過去を讀破し、現在を理解した論理的歸結である。セリグマン教授のように、マルクスの歴史の解釋とその社會主義との間には、何等の關係がないと云ふのも、またベルンシュタインのように、マルクスの價值學說が正しからうが正しくなからうが、彼れの社會主義的預言には何等の關係がないと云ふのも、兩つながら誤つてゐる。吾々はマルクスの歴史の解釋が正確なことを見た。吾々は資本制度の作用に對するマルクスの分析が、精密にして的確なことを見た。そして就中吾々は、彼れの社會主義的結論は、是等の前提から、避けがたき結論として出て來たこと、是等の前提は、彼れの社會主義的結論に絶対に必要なことを見た。そして最後に吾々は、全

體の考察が、如何に大なる光をその全べての部分に注いでゐるかを見た。よし此の點について吾々と意見を異にする讀者といへども、マルクスの學說體系は全體として受け容れ、又は全體として取り棄てることは出来るが、その一部分を取つて其餘を棄てることは出来ぬ。就中その前提を認容しないで、その結論だけを受け容れることは出来ぬといふ。吾々の主張に至つては、確かに拒むことが出来ぬのである。

(附録一) 唯物史觀と實踐上の理想主義

一九〇〇年九月發行の『イソクナシヨナル・ソツリヤリスト・レワイユ國際社會主義評論』には『科學と社會主義』といふ標題の下に、同志ロバアト・リヴス・ラモントの一文が掲載せられたが、右は唯物史觀をも取り扱つたものであつた。私は同年十月二十八日發行の『ザ・ピープル人民』に寄書して、右の論文に於いて同志ラモントの取つた見解に反對し、人間を驅つて行動を起させる動機について、社會と個人とを類推し、各々の個人は、自分の物質的利害に動かされて行動してゐるものと斷ずるのは、眞理に反してゐること
を主張した。私は之と反對に、人間をして行動せしめる動機といふ點では、社會と個人との間には何等の類似も無いといふこと、人々は其の私的行動に於いては、常に自分の物質的利害によつて指導せられて居るものではないといふこと、最も優秀な人間には、理想的の動機が第一に有力であるといふこと、そして唯物史觀は、社會にのみ、歴史にのみ、詳言すれば變化の過程を辿つてゐる社會にのみ當て嵌まるものだといふこと、更に社會の場合ですらも、過去と未來とから切り放した或る瞬間の社會を取つて見るならば、この靜止の狀態に於ける社會には、金錢上の利害